山ぎろ

第36号　平成17年11月
関東氷上郷友会

おもわず 新しい

NEXTA

人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東 京 支 店 111-0051 東京都台東区蔵前2-4-5 K-FRONTビル TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッピイ株式会社

東 京 工 場 121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12 TEL 03-3849-6611
千 葉 工 場 270-0202 千葉県野田市関宿台町2192 TEL 04-7196-1721

ネクスタ パッケイ株式会社

栃 木 工 場 323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938 TEL 0282-62-3321

山ぢさ

第36号

この土手に篠竹（しのたけ）取りし子のありき

山ざる　第36号　目次

〈表紙〉常岡幹彦画「秀峰」（6号）
〈扉・目次写真〉氷上町朝阪にて「朝霧」〈渡邊隆男・撮影〉

変るもの　変らざるもの……渡邊隆男　5

平成16年度「ふるさとの会」開催……6
会計報告書……8／祝寿の方々ご紹介……10
懇親会スナップ……12

《ふるさと随想》
ふる里は思い出の中に……木村つた江　16
恐怖の奥野々トンネル……藤井宏次　20
丹波を知らない人もいる……徳田八郎衛　21
幼少の思い出……小野木淳　23
五十一年前の手紙……小竹政孝　26

《丹波研究》
丹波生まれの三人物……谷口　捷　32
葛野に伝わる仏教文化遺産……日置孝彦　38

《丹波を撮る》柏原町・旧上山邸／消えゆく萱葺き屋根／佐治川下流を行く
船城の里を行く／萱刈峠／奥野々峠……撮影・徳田八郎衛　42

《私の職場》時代の流れと共に介護事業
「JAデイサービスセンターはだの」……原川美恵子　48

《近況・エッセイ》
山と温泉に魅せられて……山本喜則　50
「廃用性萎縮」について……田中憲雄　52
折々の記(2)……井本義一　54
グアム・ゴルフ旅行……足立東一郎　58
草の根文化交流のその後……上　高子　61

《旅　行　記》奄美の旅……生田清弘　64
《丹波通信》集まれ丹波の元気人……小田晋作　73
《ふるさとトピックス―丹波新聞から―》……76

《BOOKS》……78　《会員だより》……82　《寄附者芳名》……85
《インフォメーション》展覧会・公演・同窓会・同好会……86

協賛広告……90／編集後記……104

ふるさとは
遠くにありて
思うもの
霧の山川タンポポの路

変るもの　変らざるもの

会長　渡邊隆男

皆様お元気でしょうか。

今年は戦後六十年、あの頃紅顔の美少年?だった私も今や齢八十を目前にした老骨の粗大ゴミ、あと何年持つかと指折るこの頃です。

昭和二十年四月、蝉が殻を抜け出るような悲壮な思いで辿り着いた憧れの東京は、連日B29やグラマンが空襲する硝煙と死臭の生地獄でした。その八月に終戦、間もなく新橋や池袋、新宿の界隈に闇市が立ち、戦闘帽にゲートル姿の復員兵があふれます。やがて上野公園や千鳥ガ淵、四ツ谷の土手に桜苗木が植えられて花の東京が復活しますが、その桜も今やみな老木です。

私もあれから知らずしらずに六十年も東京に住み着きました。ところが何と、私はまだ東京っ子にはなれないのです。郷里に育ったのはわずか十六年というのに、私はなぜかまだ丹波の子、垢の抜けない田舎のヤンチャ坊主のまんまなのです。何十年も経ってどうしてこうも変らないのでしょうか。これぞ丹波の血、先祖・両親からもらった遺伝子DNAのせいに違いありません。親子の性が同じなのもDNAのせいでしょう。

☆

近年、小泉さんが靖国神社に参詣したとか日本海の岩礁に誰かが旗を立てたとか、教科書で史実を歪めたとか、なぜあんな瑣末なことが国際間のムキな駆け引きになるのでしょうか。そこへいくと我らが大先輩・芦田均さんはさすがにご立派、世界に類いのない永久不戦の平和憲法・第九条制定の立役者だったのです。立憲後間もない頃、芦田さんが関東氷上郷友会の席上で力説されたことを昨日のように思い出します。

「この新憲法第九条は、近い将来必ずや防衛の必要性を理由に改訂すべきとする輩が台頭するでありましょうが、断じてそれを許してはなりません」と。そして間もなく自衛隊という名の軍隊が誕生しました。

守るも攻めるも、戦争には変りないはずでしょうが。

平成16年度「ふるさと会」開催

平成十六年度「ふるさとの会」は、十一月二十日（土）正午より、九段会館にて開催された。総会、祝寿、懇親会と普段の通り、和気あいあいのうちに滞りなく進められた。

総会は、渡辺会長の挨拶に続いて、議事に移り、役員改選、会計報告、監査報告、会務報告があり、いずれも満場一致で承認された。なお、新役員（留任・新任）は任期二年で、平成十八年の総会時までお世話になることになる。新理事は別記の通り。

祝寿の部では、大正十三年生まれの生田清弘さん、藤原知徳さん、村上久夫さんのお三方に、会長よりお祝いの言葉と花束を差し上げた。謝辞は村上久夫さんより頂戴した。「十年来の難病と闘いながらも傘寿を迎えられたことを感謝したい。多くの人たちに支えられた人生だった」と結ばれた。

懇親会では、来賓の兵庫県東京事務所次長池田暁生さんより、祝辞を頂いた。台風二十三号による、氷上郡内の被害状況や、平成十七年の一・一七（阪神淡路大震災十年）記念行事、平成十八年の「のじぎく国体」のことなどのお話を聞いた。

続いて、今回初参加の梶原康弘さん（国会議員）、村上信夫さん（ＮＨＫアナウンサー）それぞれからスピーチを頂き宴会に移り、旧交を温めて晩秋の午後のひと時を、心ゆくまで堪能した。

なお、従来会員有志のご寄付を頂いたお楽しみ福袋は、時節柄今回より見合わせることとしたが、そのかわり、会から黒豆および山芋を各十本にふやし、抽選のうえ、ささやかながら「福」をお分けした。

午後三時閉会。会場出口に設けられた「兵庫県台風災害義援金」にご寄付いただいたが、寄せられた浄財は、当日ご出席の兵庫県東京事務所次長池田暁生さんに預託した。金額は四万四千一百六十円。

（文責・坂上勝朗）

◉平成十六年度「ふるさとの会」出席者

（順不同・敬称略）

〈来賓〉

池田暁生（兵庫県東京事務所）
山内喜夫（兵庫県東京事務所）

〈祝寿〉

生田清弘　藤原知徳　村上久夫

〈会員〉

○青垣町（3名）

足立静雄　飯田光雄　安原三智子

○市島町（11名）

井出恭子　井田悦子　荻野武　木村つた江
近藤勇　片岡クミ子　高見秀史　鶴田ゆき子
藤田徹　藤田純　丸川宥治郎

○柏原町（7名）

生田正輝　岡吉明　岡田昌子　高尾久子　谷敬三
村上善英　山本明夫

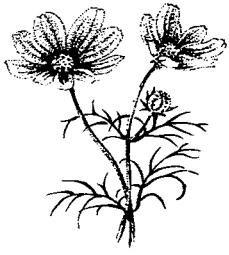
○春日町（4名）

金出一郎　木呂子恵美子　村上信夫　吉住自由造

○山南町（11名）
池田忍　小田明子　久保春雄　久保良雄　勢川武彦
仲一聡　中居篤子　千葉淳子　増井攻　渡辺貴美子
若森敏郎
○氷上町（14名）
足立謙悟　足立吉雄　安達健一郎　上高子
上田道代　上野重喜　臼井小五郎　岸本勲
小山とし子　坂上勝朗　谷口捷　谷口浩章
藤田玲子　渡辺隆男
○篠山市（1名）
梶原康弘
○多可郡（1名）
笹倉郁子

〈理事〉（敬称略／＊は新任）
○会　長　渡辺隆男
○副会長　常岡幹彦　木村つた江　坂上勝朗
○常任理事　足立謙悟　足立静雄　池田忍　大野善三
岡吉明　小田富士夫　木呂子恵美子
谷口浩章　鶴田ゆき子　徳田八郎衛

○理　事　朝倉成樹　芦田重秋　足立勲平
足立和孝　足立知佳子　足立吉雄
＊井徳正吾　上田道代　植田茂樹
＊臼井小五郎　岡田昌子　岡林逸男
片岡クミ子　岸本勲　久保良雄　直田正
＊勢正彦　勢川武彦　高見嘉都司
高見秀史　＊谷敬三　谷垣悦夫
千種倫幸　仲一聡　中居篤子　原谷洋美
＊藤田純　藤田徹　本城英明　前田武彦
増井攻　丸川宥治郎　吉住自由造
吉田勇司
○監　事　足立和己　荻野武
○顧　問　梶原清　村上末吉



会 計 報 告 書

（平成16年７月１日～平成17年６月30日）

関東氷上郷友会
会計理事・谷口　浩章
鶴田ゆき子

（単位：円）

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	1,946,237	郵便貯金 1,146,237円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円	出版費	715,151	『山ざる』35号
			通信・印刷費	114,262	総会・役員会案内等
年会費収入	346,000	延 162名	総会費	448,150	総会関係支払
総会費収入	355,000	51名	会議費	240,338	役員会等
役員会費収入	164,000	延 41名	支払手数料	13,175	振替手数料 10,970円 送金手数料 2,205円
編集会費収入	0				
寄付金	127,500	延 39名	消耗・備品費	73,423	事務用品等
広告料収入	722,500	延 59名	繰越金	2,057,781	郵便貯金 741,251円 定額貯金 800,000円 振替貯金 516,530円
その他	1,043	利子等			
合計	3,662,280		合計	3,662,280	

監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成17年８月２日

会計監査　足立和巳

荻野武

祝寿の方々ご紹介

郷友会では毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる八名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、三名の方から回答頂きましたのでご紹介します。（生年月日順）

①生年月日
②ご出身地
③上京の年月日
④上京の動機
⑤これまでに最も印象に残ることは
⑥祝寿を迎えられてひと言

〈生まれた年＝大正14年・丑歳・1925年〉この年、国民が待ち望んでいた普通選挙法が可決成立し、これまでのように納税資格がなくとも、25歳以上の男子に選挙権が与えられた。

また、この年3月1日にラジオの試験放送が開始された。海軍軍楽隊のマーチに続き、「JOAK、JOAK、こちらは東京放送局であります…」とアナウンサーの第一声が電波に乗った。次いで6月1日には大阪、7月15日には名古屋で放送が開始され、ラジオ放送が庶民の娯楽となった。

東京放送局開局記念のポスター

〈満20歳の年＝昭和20年〉敗戦の年がぴたりと満20歳。兵役はすでに19歳に引き下げられており、同年生まれの男性はすべて兵役に就き、女性は勤労動員に駆り出された。外地の激戦地で戦死する者も多かった。それだけに終戦の8月15日は命拾いに安堵し、青春真っ盛りの中で戦後へのスタートを切った。

〈還暦60歳の年＝昭和60年〉日本電信電話会社（NTT）、日本たばこ産業会社が発足した。またこの年8月、日航機が群馬県の山中に墜落、520名が死亡する大惨事となった。

〈古稀70歳の年＝平成7年〉阪神大震災の年。1月17日、兵庫県南部にM7・2の直下型地震が襲い、死者6千余名の戦後最大の惨事となった。

祝寿の方々ご紹介

小田　利江様

①大正14年2月23日
②柏原町下小倉
③昭和24年8月下旬
④結婚のため
⑤アルツハイマー病が進行。数人の同病者と共同生活。治療を行うクループホームで暮らしている。面会の際は夫・武次郎を認識している様子。
⑥よくぞこの年まで生き長らえることが出来たものだ。夫婦共同認識。（小田武次郎・代筆）

故　川村　和子様

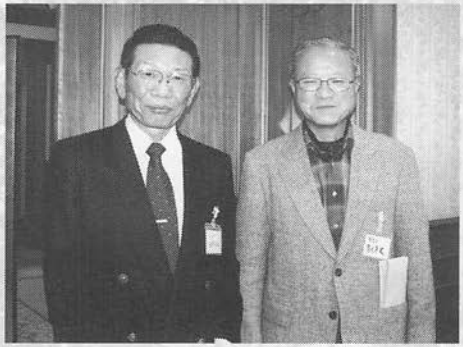
①大正14年3月7日
②氷上郡
③昭和18年?
④東京の音大へ進学のため。その後新潟に嫁ぎましたが、昭和28年再上京。
＊2年前の5月16日、東京の自宅から氷上の法泉寺へ住職だった父の墓参りに行く途中、新神戸の駅でくも膜下出血で倒れ、平成17年5月27日に亡くなりました。本当に残念です。

（三女　進藤昭子・代筆）

岩村　丈子様

①大正14年11月9日
②柏原町
③昭和37年3月
④夫の転勤　横浜市港北区日吉に家を建て永住となる
⑤。終戦の玉音放送
。我が家を建てる
。両親共に84歳で死亡す
。子供が結婚し、それぞれに家庭をつくる
。今年で88歳になる夫がすごく丈夫であること
⑥私がいつの間にか80歳を迎えるとはただ驚いている。最後まで楽しく美しく過ごしたい思いで一杯。いつまでも頭と体がクールであることのみ念じている。

懇親会スナップ



ふるさと随想

ふる里は思い出の中に

木村　つた江（市島町）

私は大正五年（一九一六）兵庫県氷上郡鴨庄村字岩戸（現・丹波市市島町岩戸）の一町歩余りの自作農の三女として、七人兄弟姉妹の真ん中に生を受けました。家族は、祖父母、両親、子供七人の十一人でした。末妹が三歳の頃は、十一人がそれぞれ箱お膳の前に坐って食事をしたものです。たまたま出入りの商人がその様子を見て、

「大勢やなあ」

と、感嘆の声をあげたものです。その頃は大抵の家で、五人以上の子供は珍しくはなかったのですが、十一人もが揃っている食事風景は珍しかったのかも知れません。

私が四、五歳の頃の記憶にはっきり残っていること

があります。秋の取り入れの忙しい日、私は風邪を引いて、独りぼっちで奥の部屋に寝かされていました。母の姿が見えなくて、きっと淋しかったのでしょう。

「おなか痛いよう」

と、大声で叫び続けていました。その声を兄と姉が聞きつけ、

「そんな、大きな声が出るんやったら病気やないわい。仮病やろ」

と、笑いながらはやし立てるのです。私はなお一層悲しくなり、大声で泣き出したのです。祖母がその声に驚いて飛んできました。

「かわいそうになあ。お母ちゃん夕方には帰ってきてやさかい、おとなしゅう待っとるんやで、これ食べてなあ」

と言うと、紙に包んだ飴やお菓子を枕元において優しく私の頭をなでてくれました。

七歳になった私は、小学校の入学式の日を楽しんで待っていました。当日は、着飾った母に手を引かれて式に行くのだとばかり思っていましたが、母は床についていて長姉と一緒に行くことになったのです。

後でわかったのですが、母は妹を出産して数日しか経っていなかったので、補習学校に通っていた長姉が母の代理を務めたのでした。私は当てが外れてがっかりしたせいか、その日は一日中不機嫌で姉を困らせたようでした。

私は小学校三年の時、運動会で悔しい思いをしました。百メートル程の運動場を一周する徒競走があり、背の高い者から六人一組になって走るのです。私のすぐ隣には、クラスで一番速い生徒がいて、いつも一着です。一等賞の賞品は『少女倶楽部』でした。私は二等でノートです。来年こそは、と頑張ってもやはり駄目で、それから数年間『少女倶楽部』を手にすることはできませんでした。

学校の行事の一つに「貯金日」という日が月に1回あり、生徒が小遣い銭を持ち寄り、教師が集めるのです。クラス四十数名は、大抵十銭か二十銭を持ってきました。私も二十銭で多い時でも三十銭でした。生徒の中に資産家の娘が二人いて、いつも五十銭銀貨を持ってくるのです。私はそれが羨ましくて、一度でいいから、と母にねだったのですが聞き入れられませんでし

た。多分小学四年の頃だったと記憶しています。

「早く大きくなって、都会に出てお金儲けをしたい」

と本気で考えたものです。

昭和の初期には養蚕業が盛んで、村でも殆どの家で蚕を飼っていました。私の家でも春になると、畳を取り払い、板張りの蚕室を作って、春蚕、夏蚕、秋蚕、晩秋蚕と四回飼っていました。高学年になった姉と私は、学校に行く前に、桑を竹籠一杯摘んでから学校に出かけるのが日常茶飯事となっていました。

夏蚕（八月）の時期は、村の盆踊りと、上蔟、繭取りが重なります。家族総出の忙しさで、子供達もみな手伝うのです。そんなとき、私は友達が盆踊りに誘いに来ると落ち着きません。考えた末、母に自分の割当分を決めて貰って、夢中でその分をこなしたのです。それから、私はあちこちの村の盆踊りに喜々として出掛けました。そんな私に、兄が〝出べすけ〟という渾名を付けたのです。渾名を付けられたぐらいで、私は盆踊りを諦めたりはしませんでした。

高等二年になった時、下校の途中でクラスの中でも悪童と言われていた男子生徒のMと些細なことから喧嘩になり、Mは私に〝黒んぼ〟、もう一人の友達に〝キューピー〟と渾名を付けて数人ではやし立てました。

〝キューピー〟と言われた友達は泣き出してしまいました。その子は毛が少し茶色で、縮れッ毛でしたがとても可愛い子でした。私はそのときは、さほど気にもしていなかったのですが、それからは何故か時々鏡を見るようになりました。

そんな或る日、私は新聞の広告欄に眼が止まりました。女性の顔半分が黒く、半分が真っ白のイラストがあり、色が白くなる薬「ハルナー」と書かれてありました。私はこの大阪の製薬会社から、こっそり自分の貯金を引き出して一ヶ月分を購入したのです。

この頃、私は東京行きが決まっていました。それは私の尊敬している教頭先生の妹さんの嫁ぎ先が東京の本郷にあり、酒店を経営していました。その住込み店員として、私を是非にとの誘いがありました。父は大反対をしたのですが、母が根気よく父を説得してくれたのです。

私は東京行きに大きく胸をふくらませていました。薬が届くと、私は誰にも見付からないようにこっそり飲み続けました。が一ヶ月過ぎても一向に色が白くならないのです。がっかりしている私を見た母が優しい笑顔で言いました。

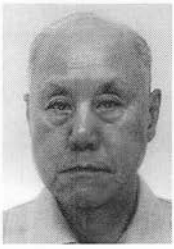
「あんたがこっそり薬飲んでるのん、わし知っとったんやで。つた江ちゃん、あんたは生まれつき色が黒かったんやないで。赤ちゃんの時は色が白うて眼がぱっちりして可愛らしかったんや。学校へ行くようになってから、毎日外でばっかり遊んどるさかい日焼けして黒うなったんや。心配せんかて東京へ行ったら水も変わるし、色も白うなるさかい大丈夫や。それにあんたは八月十三日のお盆の日に生まれたんやで、先祖の佛さんがいつでも見守ってくれてなさるさかい、これからも良いことがいっぱいあると思うで。一生懸命働くんやで、働くゆうことは、はたをらくにするゆうてなあ人のためでもあり、自分のためでもあるんやさかいなあ」

私は母の言葉を信じて、はち切れんばかりの希望に胸をふくらませて東京へと旅立ったのです。

それからの七十余年の東京生活は波瀾万丈でしたが、何とか乗り越えられた現在つくづく思うのですが、九十年の私の人生行路の中で僅か十五年間、丹波の山村で少女時代を自由奔放に生きてこられたことが、良きにつけ悪しきにつけて、心の糧となったことは確かだと信じております。これからも百歳を目指して一日一日を大切に生きていこうと思っている今日この頃でございます。

恐怖の奥野々トンネル

藤井宏次（黒田庄町）



それは多分、太平洋戦争末期か戦後間もない頃で、私たちが旧制中学二年か三年生の或る日のこと、今でも忘れられない恐怖の体験をした。

その日の授業が少し延びて、私たちが柏原駅に着いた時には既にいつもの列車が発車した後で、次の列車まで二、三時間待たねばならなかった。多可郡在住の校南分団は自宅から谷川までは加古川線で、谷川から柏原までは福知山戦を利用していたが、石炭不足のため、当時唯一の交通手段であるSL列車も本数が極端に少なかったのである。そこで数名の生徒は衆議一決、谷川まで歩くことにした。途中、奥野々峠の難所があるので、そこは校則に反して、内緒で奥野々トンネルを通行することにした。

丁度トンネルの中程まで歩いた時、突如柏原方面から貨物列車がやってきた。谷川側の出口は遙か遠くに小さな円形となって見えるが、そこまでは全力疾走しても間に合わない。

そこで、やむなくトンネル内に残ることにした。トンネル内には特別の避難所があるわけでもなく、私たちは大の字になって両手両足と背中をトンネルの側面にヤモリのようにへばりつかせて列車の通過を待つしかなかった。

物凄い地響きと共に列車が刻一刻近づいて来た。数十センチ眼前を巨大な機関車が心臓に食い込むような轟音と共に通る時は、恐怖のあまり思わず両眼を閉じて「神さま、お助け下さい」と心に念じた。

恐怖の十数秒が過ぎて、やがて列車は谷川方面に見えなくなった時、全員は腑抜け状態になっていた。

校則に反した罰として、この一件は学友はもとより家人にも秘密にしていたが、既に六十年の歳月が過ぎて時効となり、本文を寄稿させて頂くことにした。それにしても私たちは次の二点で大変ラッキーであったと思っている。

その1、列車と遭遇した地点が柏原側の上り坂で、列車が低速進行中のお陰で、風圧で列車に巻き込まれなかった。
その2、トンネル内で機関車が熱湯を排出しなかったので火傷を負わなかった。
奥野々トンネルで恐怖を共有した数名の学友達と当時を偲び語り合いたいものだが、今その名前が思い出せないのが残念である。

丹波を知らない人もいる

徳田八郎衛（柏原町）

故郷は遠くにありて思うもの。氷上郡六町の合併に伴う新市名については東京の郷友や同窓の仲間でも数年間大きな話題であった。もちろん氷上市派も丹波市派もいた。小生のように水分市を提案する少数派さえいたが、公募で最多数を占めた氷上市が選考対象の候補から外されたと聞いたとたん、誰もが「この選考はおかしいね」という点で一致した。
柏原町内の知人と意見交換すると、「氷上市は郡名の踏襲ではなく氷上町という町名の踏襲だから絶対に認めん。これ以外なら何でもいい」という態度だから、こんな雰囲気では冷静な選考など夢のまた夢と推察した。
「地名の謎」等の名著を次々と上梓する一方、先祖の貴重な遺産である地名を昭和の市町村大合併や平成の大合併で次々と消していく軽薄な日本に警鐘を鳴らしてきた今尾恵介さんの卓見を紹介したが、市名問題を評議する要職者でも彼の名や著作を知る人は少なかった。音楽雑誌の編集者だったのに二束の草鞋の研究や著作がヒットして日本国際地図学会評議員、大学非常勤講師などを務めることになった今尾さんの今までの持論は、「延喜式にも登場する由緒ある地名を棄てて軽薄なイメージ地名を採用するのは止めよう（八町村合併による八郷町や南アルプス市など。佐治町を棄て

て青垣町にしたのも同類?)。中心地に著名な地名があるのに対等合併を強調するあまり、奇妙な合成地名を採用するのをやめよう(谷津・久々田・鷺沼が合併した津田沼村や北九州市など)。やわらかさを理由とする、ひらがな市町村名の採用をやめよう(つくば市や、さいたま市など)」である。

だが、平成の大合併で登場した「身の程を知らぬ大風呂敷市名・超広域市名」には、さすがの今尾さんも呆れたもようである。近著の『生まれる地名、消える地名―「平成の大合併」で日本地図に大異変―』(実業之日本社)では奥州市、丹波市、瀬戸内市、「よそ者」の強力な反対で幸いにも取り止めとなった太平洋市などを一章にまとめ、丹波市については、わざわざ「今からでも遅くはない。再考による変更は可能だから、由緒ある氷上郡の名前を踏襲して氷上市に変更しなさい」と書き添えている。

「よそ者が余計な口出しをするな」と反論されそうだが、「史跡の保存問題では地元の行政や住民の声だけでなく必ず専門家を招聘して意見を聞く。地名の審議では、なぜ専門家の声を聞こうとしないのか」というのが同氏の持論である。もっとも初めに結論あり、の審議であれば専門家も不要である。

小生は今尾さんよりは丹波市に好意的である。というのは、多くの人が「氷上郡の名は残したい。だが残念ながら有馬郡や生駒郡のように知名度が高くない。丹波市ならば少しはマシなのでは」と考えたであろうと推察するからだ。「そこまで深く読んだ丹波市派は少ないよ」と苦笑されたが…だが丹波という地名の知名度は、案外低かった。これは小生にも意外だった。

「もしもし浦安市の徳田です。お宅で販売しておられる名産をまた兵庫県の郷里へ届けたいのですが」
「毎度のご注文有難うございます。氷の上の郡と書く氷上郡でしたね。町名をどうぞ」
「先月に町村合併があって氷上郡が丹波市になったのです」
「どんな字ですか、タンバというのは」
「昔、丹波の大江山、という歌があるでしょう」
「そんな歌、聴いたことはないですね」
「さよかー。映画によく出る丹波哲郎の丹波です」

「そんなタレント知りません」
「事例が少し古すぎたかな。東京の人なら丹那トンネルは知っているでしょう」
「すみません。知りません」
「難工事で大勢が殉職したトンネルとしても有名ですが、新幹線ができてから育った方は知らないかもしれませんな。森下仁丹の丹ですよ」
「森下ジンタン？　それ何ですか？」

東日本の人には伯耆の国、石見の国、丹波の国というのは残念ながら知名度が低いのである。最近の歴史離れと無縁ではないが……。それにつけても日本でも稀有な地形の石生・水分れを積極的に売り出しておかなかったのが惜しまれる。

幼少の思い出

小野木　淳（市島町）

時の経つのは早いもので、この秋には四十歳の大台にのります。

私は一九六五年（S40年）に生まれ、市島町中竹田（福知山線JR丹波竹田駅から徒歩約五分の国道一七五R沿い）で高校時代までを過ごしました。実家は国道沿いにあったためダンプカーなど通ると家が揺れていましたが、バイパスができた今はきっと静かになっていることでしょう。

幼少の頃の思い出についてですが、当時小学四年生のとき、先輩が毎朝お寺に通っているという話を聞いて、僧侶を目指す訳でもなく、寺子屋に行く訳でもなく、訳もわからず面白そうだと思い通うことにしました。その寺の名前は石像寺といって、自宅から西南西約一・二kmで正法山の麓に位置する三十一番札所です。古木も交えた石段で山門に出る丹波精舎と扁額を掲げて本堂が建ち、境内は石庭で在る奇石奇岩を配する禅庭で在る禅寺で座禅堂を持ち、後ろの山を借景に庭園

を造り後ろも石が中心で在る造りになっています。

毎朝五時半過ぎに起床し、約一・四kmの道のりを通い、六時に朝の鐘つき、本堂にてお経を唱え、朝食をご馳走になり、そして帰宅し小学校に行くという生活の繰り返しでした。国道一七五Rから寺に向かう道は当然山の麓にあるため急坂を二箇所上らなければならず、変速付き自転車でないととても辛かったのですが、一人ではなかったので、わいわいとやりながら楽しかったです。坂の途中に、犬を飼っている家があり、その犬は鼻の頭が赤くて「ぶた犬！ぶた犬！」と言ってからかっていました。ある時、いつも吠えてこちらに飛び掛りそうになるぐらい突進してきました。犬のひもが切れてしまい、我々は必死で一目散に逃げて何とか難は逃れることはできましたが、今思えばびっくりしたってなんの非常に焦りました。

こうして皆で通っていた寺通いも小学六年生になった時、後輩はいなくて一年間は一人で通うことになりました。一人になると甘えが生じてくるもので、毎朝五時半起きはつらくなり、母親に叩き起こされながら一日置きに何とか通ったものです。特に辛かったのは冬場で手足がかじかみ、吐く息も白く、真っ暗で寒い中通ったことでした。また、通った季節を問わず一つ目の急坂の左側にはちょっとした林と墓地があり、小学生の私にとっては、そこを通るときはいつも背筋が寒くなるほど怖く、気を紛らわすためによく歌を歌いながら、というより叫んでいました。本当に怖かったのは、私の叫び声を毎朝定刻に聞いていた近所の住人だったかもしれません。

また、事故に遭遇したこともありました。ある日、お寺からの帰り道、自転車だと国道にでるまではペダルをこぐことなくノンストップで行けます。調子よく走っていたのもつかの間、視界の悪いT字路を左に曲がったとたん自動車と正面衝突してしまいました。幸いにして手足に擦り傷はあったものの命には別状ありませんでしたが、自転車はハンドル付近の太いタイプが折れ曲がり、履いていた靴の片方が飛ばされました。探してもどうしても見つからなかった靴は、一週間後現場を探した末、約二〇mほど飛ばされた屋根の上にあり、靴の中に雨水が溜まっていました。今思えば激しい衝撃だったのも拘らず、擦り傷のみで済んだのは

石像寺（三十一番札所）

仏様が守ってくれたのかもしれません。

このように、寺通いの道中ではいろんなエピソードがあり楽しく過ごせたし、また家族のように温かく良くしてくれた石像寺の人達には感謝したいと思います。冬場は暗くて寒くて通うのも本堂での仕事も大変辛く、また月一回ある座禅会では足が痺れ非常に辛かったですが、幼少の頃にしかできない経験、体験であったと思っています。それ以上に、丹波という空気が澄んで星空がすばらしく、山、川、田畑など緑豊かな中で育ち、学んだことが何よりも良き思い出だと思っています。

現在、東京八王子で生活していますが、息子たちにはもっともっと自然に触れさせてやりたいと思います。

五十一年前の手紙

小竹政孝（柏原町）

O・N子先生から手紙が来た。手紙と一緒に、赤茶けたようなわら半紙と、写真が二枚。わら半紙はB4判。左半分には、クレヨンで描かれたオールドタイプの柱時計の絵。幼稚な絵だ。右半分には、原稿用紙のようなます目に書かれた鉛筆書きの手紙。どの字もマス目いっぱい。大きい。右端には、二年二組　小竹政孝とある。私だ！

小学二年というと、満八歳。私は間もなく満六十歳。この絵つき手紙は、今から五十一年も前に、私が書いたものだ。これはすごい。まるでタイムカプセルだ。

二枚の写真。一つは、運動会の写真。四人のランナー。その先頭を私が走っている。裏面には、二十九年前に亡くなった母の字。「高校二年、体育祭。力走、四位から一位に」とある。かなり大跳びの走り。顔は必死のように見えるが、気持ち良さそうでもある。抜かれたランナー三人は、顎を出したり、いやに傾いたりして、あえいでいる。

もう一枚の写真は、高校の制帽・制服姿の私と、五歳から七、八歳くらいと思われる四人の男児。裏面には、やはり母の字。「高校二年、近所の子らと」とある。撮影場所は、今は影も形もなくなった、私の生家の玄関先。子供たちの服装が懐かしくも、面白い。四人の内の一人は写真の中央で完全に目をつぶっている。まぶしそうな顔をした子もいる。どこを向いてるの！というのもいる。

O先生は、柏原町立崇広小学校生だった私の、一年の二学期から二年の二学期終了までの担任。私の小学一・二年は、担任の先生がめまぐるしく入れ替わった。

◇先生からの手紙（平成十七年二月十七日付）

もうすぐ桜の季節ですね。お元気ですか。男の人は家族を背負って一生懸命、大変です。病気にだけは気を付けて下さい。同封の手紙、皆が書いてくれて、長い間なおしていました。（注・『なおす』とは、私の故郷では、しまう、保管する、の意）皆には出せませ

んが、貴方には代表として見てもらおうと思い、出すことにしました。家の孫などにくらべてしっかり書いておられますね。私は、新米の先生で、ただ子供達は大好きだったのです。

頂いた写真がありました。とても良い写真なのでお返しします。長い足でよく走ったのね。

◇五十一年振りに還って来た絵つき手紙

（昭和二十九年三月二十日付）

O・N子先生へ

なまえ　二年二組　小竹政孝

先生おげんきですか。今はやさしいかながわひろし先生（仮名：筆者注）におせてもらっています。こないだは、やまへいって、おんがくをしました。先生が、あこうでおんをひいてくださいました。いちばんはじめに、おさるのかごやをひいてでした。そのうたをうたっていると、先生のことを思い出しました。先生は、いまごろびょうきになっていらっしゃるだろうかとしんぱいしました。それでもだまらないで、うたをうたいました。それから、きのうおとついえをかいて、げんとうきでうつしてもらいました。それから、けがをしたときどうするかというげんとうをしてもらいました。そうしてぼくたちはいちにちいちにちをすごしました。ではさようなら。

三月２０日土よう日

先生が戻して来てくださった品々を見た途端、記憶は五十年前に飛ぶ。懐かしい。目がウルウルし、眼の前の手紙や、写真が二重、三重にゆがむ。先生は本当に良いことをしてくださった。その感動がエンジンとなり、私は先生宛の返信を一気に書いた。

◇先生への返信（平成十七年二月十九日付）

拝復　厳しい寒さの合間に、ふと寒気が緩む日が挟まるようになり、ゆっくりとはいえ、着実に春が近づいているな、と感じさせられる今日この頃です。先生におかれましてはご健勝の由、何よりとお慶び申し上げます。

さて、此の度は、大変懐かしい、宝物をお送り戴き、本当に有難うございました。なんと五十一年も前、私が満九歳になる直前に先生に宛てて書いた手紙（と言

うのもおこがましい代物ですが）です。よくぞとっておいて下さいました。また、よくぞ読む機会を与えてくださいました。

文章の内容、表現の稚拙さには苦笑してしまいますが、記憶は一挙に昔に駆け戻り、胸にじんとくるものがあります。

大変若くて、きれいな先生。あれは、時代の先端をゆくパーマスタイルだったのでしょうか。それともオードリーヘップバーン・スタイルだったのでしょうか。当時の田舎では、そして子供の目には、まぶしく、あまりにも格好の良いヘアスタイルでした。それに何といっても、わけ隔てなく生徒を慈しむ、包み込むような愛情。私こと、先生の命名になる「イタ坊」（イタズラ坊主）は、先生にメロメロでした。どこを探しても居ない、素晴らしい姉のようでもあり、また、慈母のようでもありました。

私は、先生にくっつきまわっていたに違いありません。私は、一年生の時に最軽度の（だったと思います）結核に罹り、大して長い期間ではありませんでしたが、激しい運動と日照を禁じられていた時期があります。そのお陰で、体育の時間には、運動場でクラスの皆ながドッジボールなどをしているのを、崇広小学校名物の大柳の木陰で、先生の横にくっついて見学することができました。その時の嬉しかったこと。先生を独り占めしているような喜びです。先生と手をつなぎたいなー、先生にもたれかかりたいなー、というような大胆な気持ちを抱いていたかも知れません。

此の度お送り戴いた、五十一年前に私が書いた先生宛の手紙。先生の後任は、「中川（なかがわ）」先生なのに「かながわ」先生と書いています。小さい時から六十の今になるまで、ずーっと慌て者のままです。

「教えてもらっています」が「おせてもらっています」とは、自分が書いたものながら、たまげてしまいます。「おさるのかごやを『ひいてでした』」とは、懐かしい丹波言葉（言い回し）です。

「先生はいまごろびょうきになっていらっしゃるだろうかとしんぱいしました。」何と恥ずかしい。「びょうきになっていらっしゃるのではないだろうかと」と書く能力は未だなかったようです。でも、一人前に敬語を使っているのがおかしいですね。

末尾の日付の書き方も、「三月２０日」とは。漢数字、アラビア数字ごちゃまぜで、何とも幼稚な粗っぽさですね。

此の度の先生からの懐かしいお便りに刺激され、母がとっておいてくれた小学一・二年の時の通信簿やら写真を久しぶりに取り出して眺めてみました。

先生には、一年生の二学期（昭和二十七年の秋）から、二年生の二学期（昭和二十八年の冬）まで担任していただいております。

まだ小さい私達のこととて、「O先生は忽然として、我々の前から姿を消された！誰かに先生を奪われた！」ように思い、長い間先生を切に恋しがっておりました。今般お返しいただいた手紙も、そのような切ない気持ちを抱いていた日常の中で書いたものです。

当時の私の通信簿に先生が記入されたコメントを、是非先生にお知らせ致したく、その全文を左に記載いたします。（原文のまま忠実に記載します。）

☆一年生二学期（昭和二十七年十二月十八日付）

力が大分身についてきた感じですが、算数の方がもひとつがんばってもらわねばならないと思います。

☆一年生三学期（昭和二十八年三月十七日付）

良く努力されました。素直でそぼくなところがあって作文などにそのいい面がはっきりでます。ただ、末っ子らしい我がままが時々見られますので、将来学級リーダーになる人ですから改めておいてほしいと思います。良き二年生になられます様祈っています。

☆二年生一学期（昭和二十八年七月十九日付）

眞面目によく努力されます。勉強も作業も大変熱心で常に学級の指導的立場にあります。明るく元気でよろしいが、少し元気すぎる事もあります。

☆二年生二学期（昭和二十八年十二月二十三日付）

力の弱い子、気の弱い子をいたわって、今のますくすくと大きくなってください。今学期もよく努力されました。

（以上です）いやー、恥ずかしい限りです。先生、総じて褒め過ぎです。

しかし、少ない字数で、実に的確に私の在りよう、特徴を親に伝えておられます。先生の観察眼には本当に感心致します。我儘は、今も治りません。

算数は、弱い家系のようです。当時、先生にはご心配をおかけしたようですが、その後、私もそれなりに努力したのか、あるいは、算盤を四年ほど、一級になるまでやったのが良かったのか、いわゆる「算数」はよくできるようになりました。ところが、「算数」の世界から微分・積分・順列・組合せなどの「数学」の世界に入る高校二年の頃から、皆目解らなくなり、もうどうにもなりませんでした。残念ながら、この遺伝子は確実に私の子供達にも受け継がれてしまったようです。皆な文系に進みました。

普段は鳴りを潜めていますが、いざとなれば「元気過ぎる」元気もいつ顔を出すか分かりません。自重致します。

二年生の二学期終了を以って、先生は突然私たちの前から姿を消されました。私達は置いていかれたようで、小さな心で大変寂しい、つらい思いをしたように思い出されます。

続く三学期は、中川先生に教えていただいたのですが、通信簿の三学期の通信欄には、担任のコメントは記入されておらず、ブランクのままになっています。さぞかし、あわただしい事情でもあったのでしょうか？

今般、絵手紙と一緒に返して戴いた私の高校時代の写真二枚、有難うございました。これらの写真がどうして先生のお手許にあったのでしょうか？　私がお送りしたのでしょうか？　あるいは、母がお送りしたのでしょうか？　兎に角びっくり致しました。（先生に懇意にしていただきました、母は二十九年前に亡くなり、父も二十三年前に亡くなりました。）

今、私の手許にひな祭りの写真があります。裏面には、「昭和二十八年三月三日　一年生ひな祭り」と母の字で書かれています。私を含め四十九人の男子生徒が、自分達で作った紙のお雛様と共に四列に並んで、写っています。皆な時代にふさわしい、貧しい服を着ています。しかし、つい七年七ヶ月前まで戦争があったなどとは思えない、皆な底抜けの明るい笑顔をして

います。（もっとも、昭和二十年生まれの私達が戦争を知る由もありません。親や兄・姉など大変苦労した人達の解放感まで代弁しているかのような、本当に明るい子供たちです。）

先生は最後列中央です。ヘアスタイルと笑顔が素晴らしいです。本当に美人だなあ。

私は、と言いますと、前歯が一本か二本欠けているようですが、顎を上げてカラカラと笑っています。それにしても、生徒はどうして男子生徒だけなのでしょう。一度に写せないから、男女を分けたのでしょうか？

此の度は、本当に有難うございました。お陰様で、今は体の中をさーっと風が吹き抜けたような、爽快な気分です。

家内も、子供達も一緒に先生のお便りを楽しませていただきました。私達師弟のことを羨ましがっております。家内は丹波生まれの同郷人です。二歳年下の早生まれで、学年は一年違いです。三十五年前、大阪万博の年に結婚し、一男、一女をもうけました。長男は三十三歳、長女は二十九歳です。娘は三年前に嫁ぎました。私も今年は還暦です。まだ、孫はおりません。

半生を振り返りますと、気合だけで生きて来たような気がします。社会に出てから今日まで一貫してサラリーマンで過ごしましたが、それなりに頑張って来たと思います。小さい頃から農作業で鍛えた体は、未だに貴重な財産です。体だけは丈夫で元気です。

写真を一葉同封致します。会社での一コマです。左端が私「イタ坊」です。

懐かしさ、嬉しさのあまり、大変長文になってしまいました。そろそろ筆を置きます。またお便り致します。

先生、くれぐれもご自愛ください。そして、いつまでも私達のあこがれの先生としてご健勝でいらしてください。

敬具

五十一年前の崇広小学校二年二組生徒

小竹政孝

O・N子様

（先生は、今年喜寿を迎えられ、ご健勝にて古都にお住まいである。）

丹波生まれの三人物

谷口　捷（氷上町）

ここに上げた三人の方は、丹波で生まれ幼少期を過ごされて後、世に出て活躍されたが、丹波出身とはあまり知られていないという共通項があるだけで、如何なる関連もないし、その人物論を書く能力も持ち合わせていない。

ただその方達との関わりで、最近思ったことを新年初頭に記したものである。

知人からの賀状「私には現在の民主主義は愚人が足を引っ張ることを容認する思想であり、怠け者でも気楽に住みうる社会を形成する思想であると思えてなりません」にどきりとしながらも、愚人も自由に意見を言える社会に感謝しながら述べさせて頂く。

山口駿河守

平成十年『山ざる』誌29号で丹波紀行を書いた時、旧サッポロビールを退職後に専門の農芸化学を生かし、現在は氷上町谷村で酒造をしておられる打田輝一さんより感想と共に聞いた人物である。本年の彼の賀状によると、郷土誌の勉強を始めたとあるし、是非発表して欲しいと思っている。

私の愛読書『鬼平犯科帳』『剣客商売』といった長編の作家池波正太郎さんの短編集『黒幕』を読む機会があった。それによると、戦乱の世が始まる時期に丹波国新郷にある赤井時家の城で生まれた幼名新五郎は十五歳の春に忽然として城から消えた。その後どのように過ごしたかは定かでないが、四十二歳になり、徳川家康に召しだされて後、重要な場面で活躍された様子を知る。黒幕とは、辞書によると陰で指図する人とあるが、現代のブレーンといったところで、この良悪は大変社会に影響を及ぼすことは歴史の示すところである。世の中は表に出なくても陰で活動され、支えている人が多くいるので維持できているのであって、当

然のことながらマスコミ等に登場する人だけが世の中を動かしているのではない。

昨年は地球上であらゆる大きな自然災害が発生した。これは地球温暖化と無関係でないと思う。私の手元には二人の賢者の書籍がある。糸川英夫著『人類は21世紀に滅亡する!?』（徳間書店刊）と西沢潤一著『人類は80年で滅亡する』（東洋経済新報社刊）である。

前者は、ロケットで有名な科学者であり、後者はノーベル賞を貰われていても不思議でないと賞される学者である。現在の環境破壊は無力な自分も黙っておれない問題である。本年は「京都議定書に基ずく温暖化ガス排出削減」が発効されるのに、排出国第一位の米国やロシアといった大国は積極的でない。排出国第二位で誇り高い中国も、この問題では後進国に入り義務がないそうだし、人口世界一位もすぐと言われるインドもあり、日本がここで積極的に国際貢献して名を挙げて欲しい。

私が毎週のごとく会っている知人は、昨年夏、癌が発見され余命一年と宣言されながらも、新エネルギーの開発動向をまとめておられる。自然災害には人智が及ばないにしても、人為的な災害はなくすように努力しなければならない。その最たるものは石油、ガスエネルギーの依存と車である。昨年、東京都で不祥事のあった自動車排気ガス問題を考えるにつき、最近開発された大変な技術であるハイブリッド自動車もステップとして歓迎されるものであるが、消極的対策と言わざるを得ない。一歩進めて汽車を電車に換えたように自動車もガソリンから電気にすれば一挙に解決すると思う。燃焼によるエネルギーの使い方は、電気にした方が効率の面や制御の面で優れている。仮に現在の火力発電の方法でも、三分の一に削減できるそうである。

これについては最近読んだ船瀬俊介著『疾れ！電気自動車』（築地書館刊）は示唆に富んでいる。発電方法としては地球上の各地の事情に合った炭酸ガス発生のない太陽、水力、風力、温度差、バイオといったいろいろな手段がある。現在のように世界に遍在している化石燃料に依存し、産油国だけを利するに比べ公平性、安全保障からも良いし、争いも緩和され平和のためでもあると思う。

国の進めている燃料電池車と比べて、インフラの問

題一つ考えても、すでに各家庭に充電用コンセントがあり優れている。かつて燃料電池に関しては友人と議論したおり、自動車よりも家庭用発電の方が早いと主張したが先日の新聞広告ではリースによる実用化が発表されていた。

コンピュータの進歩を考えると現状の電気代相当になるのはすぐだ。重要な蓄電の問題だが、小型ではすでに実証済みのリチウム電池が有望だそうである。リチウム資源埋蔵量は無限で、リサイクルが完全に可能だそうである。柏原高校同級生で元大阪大学教授の足立吟也君は希土類化学の権威である。電話で意見を聞いてみた時に名前が出た小菅皓二京都大学元教授は長い間理学部化学科で研究されていた人であり、彼等は別途での知人のようだが私は学生以来の親友である。

本年は一緒に話を聞かせて頂く機会が出来ることを楽しみにしている。

災害後の被災地への援助自体尊いことであるが、もう一歩進めてこの環境問題は後処理でなく、少しでも災害を減らすために、全人類が解決策を考える努力をすることが後の世のために必要ではないだろうか。

かく言う私自身はと問われると、丹波での山の維持、太陽発電、太陽熱による温湯と上げてみても無力感だけが残る。

春日局

前記の『山ざる』誌で丹波紀行を書いたおり、多くの人より丹波生まれに関して否定的な異論を聞かされた。知人からは「そんなことを信じているのか」とまで言われたし、私は夢であってもよいと記した記憶がある。

最近の丹波新聞によると、大分県臼杵市の市立図書館所蔵の稲葉家御家系典に「丹波の氷上郡春日部庄に生まれたからこの名をなす」と記述されているそうである。このように歴史における古文書は素人にとってはつまらない物と思われても、見る人によっては重大な情報を持っている。権威や有名人の説をも覆す威力がある。自分の関与した技術の世界でも似たことがある。方法の比較等で、コンピュータによりシミュレーションをすることである。実現する資金もなく、地位

もない人間が唯一対抗できる手段であった。このお陰で、専門家でもない自分もなんとか生活していけたと感謝している。世の中のいろいろな問題にもこういった公正な評価手段があれば、今のような闘争も減少すると思う。例えば政治システムモデルが出来て各々の異なる意見がシミュレーションで将来の結果を推定評価出来るようになればと夢のようなことを考えている。

昨年の暮に専修大学川崎市公開講座を受講した。「海山道で結ぶ相模武蔵の歴史」という内容であった。そこで平将門の本を読んで以来、疑問として頭の中にあった「上総、下総」の位置関係、京都での「上京、下京」とか道や川の「上流、下流」とも異なるのが、現在と違って千葉県は陸路でなく海路が主であったことを知って氷解した勉強であった。そこでも町田市には三代にわたる「小島日記」があり、専門家に貴重な情報を提供していることを知った。また佐原市の伊能忠敬記念館に行き知ったと思うが、忠敬が測量日記のような膨大な記録を残したのは伊能家の古記録がある事件で重要な役割をなしたことを身を持って経験し、記録の大切さを痛感したからだそうである。

昨年の氷上郷友会での雑談の時、柏原高校同級生の木呂子さんの家には古文書が沢山あり処置に困っていると話されていた。その内容は想像できないが、江戸時代の由緒ある家のようであり、素人にはなんでもない記録から専門家は重要な情報を掴む。無駄でも、市の然るべき所に相談されることを願う次第である。

金出武雄氏

平成十六年十一月八日から十二日までの日本経済新聞「人間発見」で紹介されていた。この人に関しては、故和久勝彦君よりずっと以前に聞いていたのが頭の奥に残っていたからであろう、すぐ目に留まった。カーネギーメロン大学教授で世界のロボット研究をリードする研究所所長を十年勤められたと紹介されていて、奥丹波の氷上郡春日町で生れ神戸に行かれて後、京都大学電気系にトップ合格とあり、大学院は坂井利之教授の研究室であり、助教授をされてから米国へ渡られたとある。

余談だが、坂井先生は小生もコンピュータ用文字の

開発プロジェクトに携った時に御一緒させて頂いた方である。兵庫高校から京大を受けたのは、長兄に言われたからですと言われている。昨年の関東氷上郷友会に出席し、偶然横の椅子に座られた方の名札を見て、話しかけてみると正にその方であった。私の二年上で柏原高校におられたとのことで、お話を少し聞かせて頂いたが、この方も御活躍された人のようである。丹波の集りに出席すると、同郷というだけで得難い経験が出来ることに感謝している。それと同時に人間の能力と教育について考えさせられた。

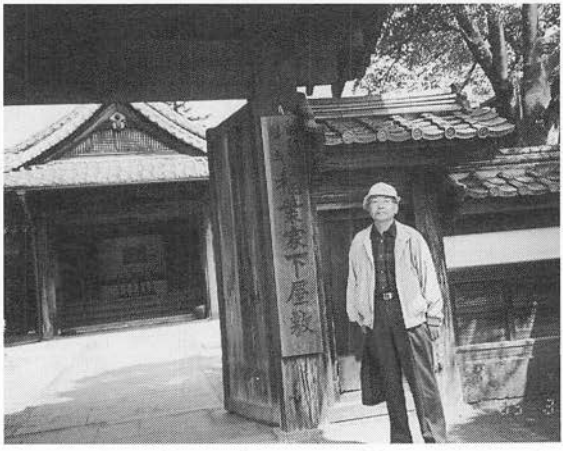
新聞では主要41か国の学力調査結果が発表され、日本の学力が大幅に低下したと報じられていた。ゆとり教育には意見があって当然である。その言葉には教育は苦しみの響きがあるり、知識を教え込むことだけが教育と考えているように感じる。健全な競争は苦しいだけでなく活性を与え楽しいことはスポーツ、ゲームといった卑近な例を上げるまでもない。また、どのような社会でも何らかの競争は避けて通ることは出来ないし必要なことでもある。かのアインシュタインは「教育とは価値ある贈物であるべきだ」と言われたそうだが、私は大学に入り非常に大きな贈物を頂いたと感謝している者である。私のささやかな経験を述べさせて頂くと、自分は記憶力貧しくて、暗記力を試されるだけの勉強は全く楽しくなく、可能なかぎり避けて通ってきたが、考えることは苦痛ではなかった。社会人になって、専門でもなく未経験の分野でも楽しくなったのは、偉い人や権威のある人の説を無条件に覚えることを諦め、自分で考えることを学んだからと思う。これは大学での経験が大きい。大学入学が最終目標のごとく考えておられるのではと思われる人がいるが、私にとっては出発点であった。

講義について思うことがある。整理され用意された講義は効率的に伝えるには良いが受け手にとってはどうも後に残らないようである。特に最近のプロジェクター等によるものは、すでに知識のある人にとっては良いが、そうでない人には無駄がある方が優れているように思える。無駄と思える雑談が不思議に印象深く残っていることは誰もが経験することであろう。私の経験では、三時間に渡りメモひとつ無しで修正や変更を繰り返されながらの講義に感動したのを今も忘れら

れない。如何なる物を持ち込んでも良い試験等からは問題解決の考え方や研究する仕方を学んだ。勿論、能力の問題で成績はよろしくなかったが、以後社会に出てから、専門でない分野でも積極的に飛び込んで行けたようで、ダム関係の解析をはじめ土木関連、建築関係、ファクシミリ等の電子技術の仕事と脈絡なく行うことが出来たように思う。要は自分の特徴を知り、不得意な分野では勝負しないことである。それと自分で考えるということは非常に難しいことだが、金出さんが我々凡人にも参考になることを示唆されている。

論文を書けないと悩まれたとき、後に京大総長になられた長尾真先生より「具体的なことをやりなさい」というアドバイスが良かったと述べておられる。私も理解できない抽象数学の講義も具体的イメージが描けると、重要さが分かり楽しかった経験がある。述べる資格の無いことを書いたようだが、馬鹿の戯言と流して頂きたい。

〈追記〉本年三月には国宝石仏で有名な臼杵市に行く機会があった。十五代続いた稲葉五万石の城下町であり、稲葉家は美濃の斎藤道三の家臣稲葉一鉄をはじめ



武人の家柄であり、春日局はその姪にあたる。その縁故から一時期暮らしていたと伝えられている場所もあり、落ち着いた情緒ある街で一度は訪れて見たいところである。また四月には幸世中学同窓会があり帰省して、上記打田氏の案内で赤井伊賀守居館跡である後谷城跡、それに稲継城跡を見る。翌日は高見城跡の登山を行い、登山道もきちんとしていて丹波でも保存努力をしておられる人がおられるのは喜ばしいことである。さらに嬉しいことだが、五月十二日の日本経済新聞朝刊で、あの不祥事続きの三菱自動車が次世代電気自動車を開発したという記事を見て、成功を祈る次第である。

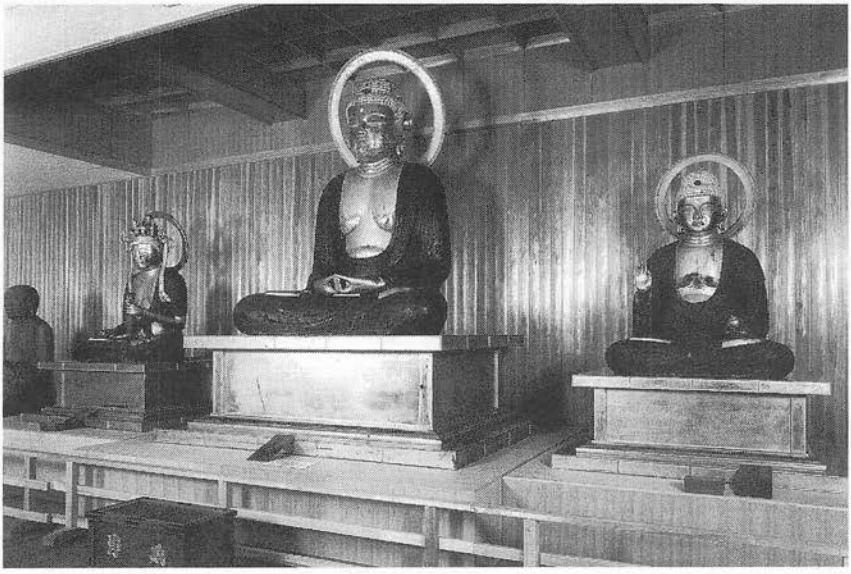
葛野に伝わる仏教文化遺産

日置孝彦
（氷上町）

氷上郡の六町が合併して昨年十一月一日、丹波市が誕生した。丹波市は、兵庫県北東部の西丹波の山々に囲まれたところにあって、豊かな気候風土に育まれた地域であるが、秋になると霧が深く多湿な一面も見られる。

丹波国のいにしえを辿ると、奈良時代の和銅六年（七一三年）に丹後国から分離独立している。『和名抄』によれば、何鹿、桑田、船井、天田、氷上、多紀の六郡から丹波国が構成されていることが記されている。明治時代、廃藩置県の際、明治四年（一八七一年）何鹿、桑田、船井の三郡は京都府となり、天田、氷上、多紀の三郡は豊岡県となった。その五年後、明治九年（一八七六年）には、豊岡県が廃止されたので天田郡は京都府に、氷上、多紀の二郡は兵庫県に編入されたのである。丹波市の生い立ちは、丹波国を構成していた六郡の一つ、氷上郡であることが明らかとなった。

その氷上郡のなかでも葛野の里（現在、氷上町西地区）に大陸文化の花が開花したことは紛れもない事実である。大陸文化はもとから日本になかった文化である。日本は島国のはじまりであることが神話によって明らかなように神代の国でもある。しかし、日本に存在しなかった外来宗教が大陸からもたらされていたのである。それはインドの釈迦が御仏の教えを信ずる者は、すべて救われることを説き明かした教えである。聖徳太子は、仏教に造詣が深く、手厚く保護し自ら飛鳥寺、法隆寺、四天王寺など創建されたことが知られている。平城京に遷都後、聖武天皇は東大寺を建立され、総国分寺に定められた。聖武上皇崩御後、遺品は東大寺に施入されたが、その一部は、正倉院に伝存していることが明らかである。確かに奈良時代には大陸から伝来した仏教によって国際的な天平文化が栄えたことは歴史に語られている通りである。そのもっとも



達身寺の仏像

象徴的なものと言えば、東大寺の大仏造立である。当時、日本文化や貴族社会の基礎が形成された時代でもあった。

葛野の里に大陸文化の花が咲いたと言ったのは即ち仏教文化のことである。仏教文化に関心を持つ人は、年齢を重ねる毎に多くなるのではないだろうか。そんな疑問が脳裡を過ぎるのである。仏教文化と一口に言うは易い。しかし、広大無辺で深遠なものである。

それでは仏教文化と言えば、絵画、彫刻、工芸、金工、書跡、印刷、芸能、音楽、建築、医療など多種多岐にわたっていることが知られている。そのなかで葛野に直結する項目として仏像彫刻であることがお分かり頂けたと思われる。元来、仏教に関しては難しいという先入観念が働いている。そこで仏像について、簡潔で明瞭にわかり易く説き明かせば、仏像彫刻に興味が湧き理解されるものと思われる。仏像とは、御仏の形姿を造型形式に表現したものであることは言うまでもない。厳密には、仏とは如来のことである。如来は、最高の悟りの境地に達した存在であって崇高に満ち満ちている。経典には多数の如来が説かれている。釈迦、

阿弥陀、薬師、多宝、大日などの如来像がある。次に菩薩は、如来の境地に達するために修行している存在であることを表わしている。菩薩には独尊といって、その像だけが独立して安置される場合と如来像の両脇に立つ場合とがある。

独尊で礼拝するのは、地蔵よりも観音像が多いことが知られる。釈迦三尊（文殊、普賢）、阿弥陀三尊（観音、勢至）、薬師三尊（日光、月光）などがある。そして明王は、人々を仏の道に従わせるために忿怒の力強い形相に作られる。不動、降三世。大威徳、愛染など密教で見られる明王像がある。

一般には、これらの像を含めて広く仏像と呼んでいる。仏像は大別すれば、如来、菩薩、明王、さらに天部、神将像などの種類がある。いままでに述べてきた数々の仏像は一体いつ頃からどのようにして彫刻製作されたのだろうか。

仏像彫刻製作に携わった奈良時代の人たちは、仏師と呼ばれ、官営工房に所属し官寺の造仏に従事するのが一般的とされている。仏像を製作する工房として造仏所が設置されていたことは伺い知ることができる。葛野には仏像彫刻を製作するための工房として造仏所が設置されていたのではないかという疑問が湧いてくるのである。それを解く鍵は、清住の達身寺である。達身寺の開山は、大菴清鑑という高僧で、円通寺第二十五代住職に住山した。円通寺は、南北朝時代永徳二年（一三八二）の正月、室町幕府第三代将軍足利義満が後円融天皇の勅命を奉じて創建された曹洞宗の古刹であることは周知の事実である。達身寺の本堂は元禄年間（一六八八―一七〇三）に建てられている。その当時、達身寺の開山以前には、山中の人気のない御堂にひっそりと眠っていた多くの仏像を、現在地にある本堂に安置し護った功績は大きい。明治時代、達身寺に安置された多くの仏像に学術調査のメスが入った。

その結果、八十余躯に及ぶ仏像中、国指定の有形重要文化財として「達身寺仏像十二躯」が、明治四十四年四月十七日に指定されている。国指定の仏像には、如来像四躯（阿弥陀如来坐像二躯、薬師如来坐像二躯）、菩薩像の独尊像六躯（十一面観音菩薩坐像一躯、十一面観音菩薩立像三躯、聖観音菩薩立像一躯、地蔵菩薩坐像一躯）、天部像（吉祥天立像一躯）、神将像（兜跋

毘沙門天立像一躯）これが十二躯の内訳である。国指定にされなかったその他にも破損しながらも注目すべき仏像が多いのに驚くほかない。国指定から六十四年後、県指定の有形重要文化財に「達身寺木造仏像類三十四躯」が、昭和五十年三月十八日に指定された。時代的には、平安時代から源頼朝が関東の鎌倉に武家政権を樹立して鎌倉幕府成立までの四百年に及ぶ長い時代にわたっている。日本彫刻史上、様式的にも技術の面でももっとも変化に富んでいる。その変化は、日本人の立体的な造型感覚に一つの曲型を見出し、時代性となった。

　このように多数の仏像彫刻が、氷上町西地区に伝わる平安の美とも表現できるほど、一地域で、四世紀の長い間造仏製作されたことは、文化史、美術史、社会史、仏教史などの上から見逃せないことで、今後これらの大きな課題の一刻も早い解答が待たれる。これら多数の仏像彫刻の分散の危機が生じないことを祈り、一括して保存管理することの意義は深い。

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますよう願い上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、〝丹波のきずな〟の強さを思います。

（山ざる編集部）

頑張っています！
柏原町大新屋の旧上山邸

大新屋は下野の国佐野藩の領地であり、上山家は、その代官を務めた。
代官の格式に合った駕籠をはじめ貴重な器物が残されている。

丹波を撮る

撮影：徳田八郎衛

消えゆく萱葺き屋根

これだけは今も健在です。柏原町屋敷の田原邸。
柏高生の写生には絶好のターゲット。

柏原町屋敷の川井邸。
昨年解体されました。

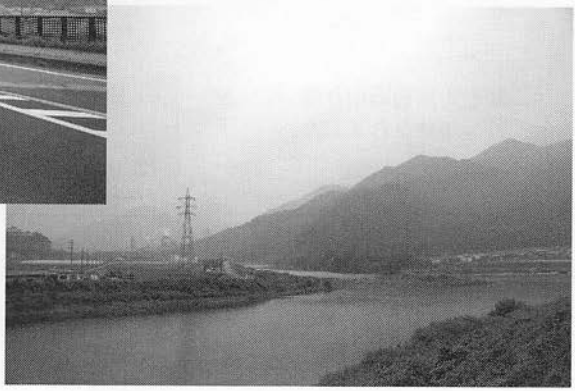
柏原町石田本通りの森下邸。解体後は、㈱まちづくり柏原
が保管中していますが、先立つものは……

佐治川下流を行く

山南町井原橋側に登場した
石龕寺仁王像のダミー

「首かけの松」周辺は、今も
変わらぬ雰囲気（氷上町朝坂）

拡幅された山南町 井原大橋



井原橋から見た谷川方面の風景は変わらない

丹波を撮る

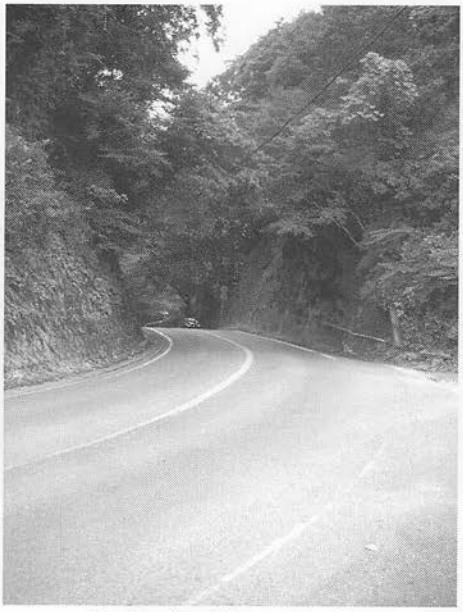
船城の里を行く

丹波市内の峠

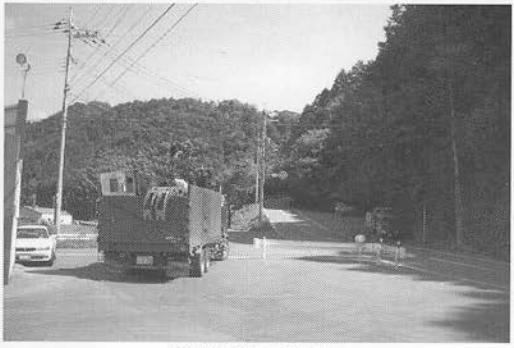
丹波市内の大半の集落は平地伝いで往来できるが、大迂回を避けたければ坂や峠を越すことになる。読者想い出の坂・峠を連載で紹介する。

萱刈峠

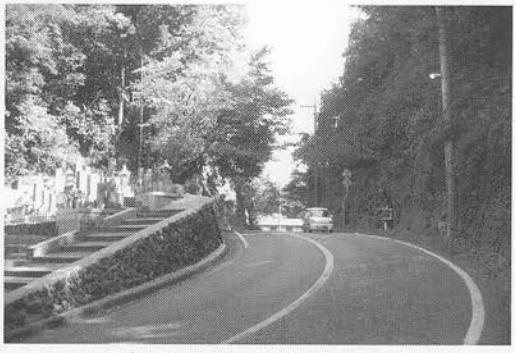
旧沼貫村、小川村、和田村から柏原へ通うのに障害だった坂。極端な片峠で、佐治川側から300mもの長い坂を昇りきると旧新井村鴨野の人家や田畑が待っていた。この坂を避けて国道175号沿いに自転車を進める生徒も多かった。



柏原町鴨野側から見た萱刈坂

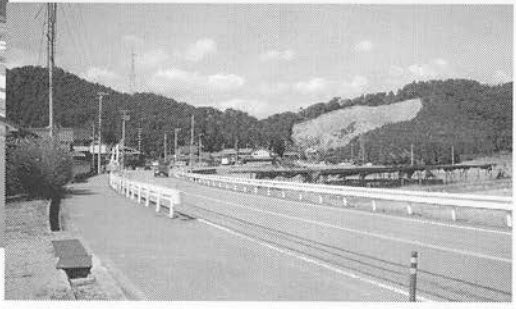


稲畑側の長い坂



頂上近くでは鴨野の人家が見えてくる

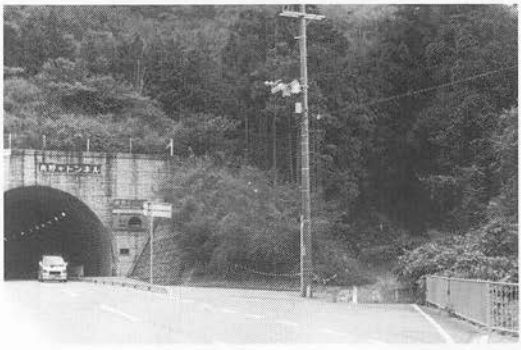
鴨野側から見た峠



丹波を撮る

奥野々峠

谷川から鉄道は奥野々トンネルを、人馬は奥野々峠を越して柏原へ向かう。峠と呼んでおかしくない厳しい坂であった。



谷川と柏原を結ぶ奥野々峠も今はトンネル(谷川側)。右に旧々道（1車線）が見えます。

今は廃道ですが、立派な2車線の旧道。

旧道の峠（谷川側）

柏原町上小倉から見た奥野々峠

上小倉には、このような屋敷がまだまだ健在です。

私の職場

時代の流れと共に介護事業

「JAデイサービスセンターはだの」

原　川　美恵子（春日町）

私は、氷上郡春日町野上野で誕生し、高校卒業まで両親の元で暮らしておりました。柏原高校卒業と同時に京都へ出て、京都大学付属看護学校で看護師の免許をとり、府立保健婦学校（現京都府立医科大学の保健師専攻科）に入学し、保健師と養護教諭の資格を取りました。

その後、小田原市立足柄小学校の養護教諭を七年勤め、出産のため退職し、一〇年間に三人の子育てをしました。三番目の子が小学生になってから勤めを再開し、市役所、保健所の非常勤勤務をし、JAの病院に保健師として就職しました。検診後の結果や人間ドックの結果に基づき、結果の改善のため、生活習慣病予防について指導する仕事をしていました。

介護保険によるサービス開始にあたり、ケアマネージャーの資格を取り、JAはだの（秦野市＝私の居住地）のケアセンターで管理者兼ケアマネージャーの経験を積みました。

その後、今勤務している「JAデイサービスセンターはだの」で今は管理者兼看護師として勤務しております。この施設は平成十六年四月にオープン、現在一日四五人の利用者受け入れの申請をし、平均四〇人のデイサービスとなっております。

高齢者の方を受け入れる施設ですので、絶えず気を抜くことはできませんが、楽しいことも多くあります。職場では最高齢の私が、デイルームに入れば「若いね……」

と利用者から言われるその心地よさ。兵庫県小野市の病院に入院している母を思うとき、利用者様が母のようにも思え、大変にいとおしく思うことがあります。

介護保険改正に向け絶えず気を張り、時代の流れに乗っていかなくてはいけません。やっと軌道に乗りかけたデイサービスの事業所に訪問介護事業、居宅支援事業所の合併吸収や、訪問看護や訪問入浴の新規事業を検討中でもあり、息つく暇もありません。地域の研修会や高齢者の集い等の講師として招かれることも多くあります。

こんなに忙しい仕事があり、やりがいの有ることは、大変幸せなことだと思います。定年まであと三年足らず、年を感じる暇もなく夢中で仕事に没頭できる今の環境に感謝して、身体に気をつけ、少しでも社会に役立てればと、思います。

＃

最近の趣味として、小唄や三味線を楽しんでいます。日本橋三越劇場へ小唄観賞会へ行くときは最高の贅沢を感じます。こんなリフレッシュをしながら、一度しかない人生、残りのほうが少ない人生を大いに楽しくかつ有意義に過ごそうと思っています。

現在、神奈川県秦野市に住居を構えており、関西へは主人と私の両方の母を見舞いに帰る目的で行きますが、故郷はなかなか遠い所となっています。

同業の方がいらしたら下記へ知らせください。

〈勤務先〉ＪＡデイサービスセンターはだの／神奈川県秦野市平沢４３５／☎０４６３－８５－５１７７／所長＝原川美恵子

山と温泉に魅せられて

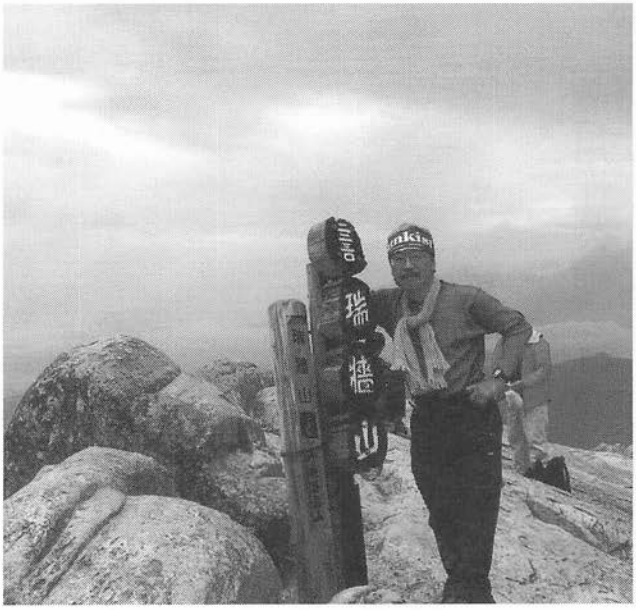
山本喜則（市島町）

三年前の夏に長年の夢であった富士山登頂を実現しご来光に感激して以来、登山の魅力に囚われている今日このごろである。かなり以前から体力維持やストレス解消の一環としてやっている早朝ウォーキングの効果のためか体力的には自信を持っております。富士山登頂後は、関東近辺の手頃な山を選んで週末に登ってきたが、昨年からは深田久弥の「日本百名山」にターゲットを絞り、ただ今挑戦中であります。頂上に立って味わう達成感や爽快感は何ものにも代えがたく、登る際に味わった苦しみも直ちに吹っ飛び、次なる挑戦に掻き立てられております。

#

現在のところはサークル等には所属せず、単独行か家内もしくは近所の同趣味を持つ友人夫婦と一緒に登っております。好天に恵まれ、山頂で眺望を楽しみなが

ら弁当を食べ、お湯を沸かしてコーヒーが味わえればまさに至福のひと時。逆に突然の雷雨に襲われ、かなりビビッたことも再三あるが、終わってしまえば、それはそれで楽しい思い出。目標とする山の情報を事前に収集したり、特有の草花や樹木を観賞しデジカメで撮影・編集するのも付随する楽しみであります。登山に出掛ける前の日は童心に返って、遠足前夜のようなわくわく感を味わっております。



＃

なぜ、もっと若い頃に山の魅力が分からなかったのかと思うことがよくあるが、それは丹波で生まれ育った自分の周りには名山といわれるような高い山がなかったからだろう。竹田地区で目の前にあるのは高谷山のみで標高四五〇m位だったと思うが、一、二回登った記憶はあるものの登山には無縁でした。会津の磐梯山（一八一九m）では、地元の小学生グループが大挙して登っていたが、「〇〇富士」と呼ばれるような名山に登るという幼時の体験が、きっと山に対する愛着の原点になるのだろう。とはいえ、現在の自分は丹波生まれの申年ゆえの帰結なのだろうか……。

＃

今夏は、帰省の際に足を延ばして鳥取の大山と滋賀の伊吹山に登ってきました。これまでに二十四名山の踏破で、まだまだ先は長い。仕事のからみで現在は時間にも制約があり、この先幾つ登れるか判らないが、

とりあえずは自分の年齢の数を目標としてチャレンジしたい。まかり間違っても百名山全踏破への強い思いが逆にストレス（多くの中高年の登山愛好家に見られる症候だそうである）にならぬようにと自戒している次第。

#

もう一つの趣味は全国の温泉めぐりで、これまでに七六〇箇所（丹波周辺の大半の温泉を含む）を踏破してきたが、高知県、長崎県、沖縄県の温泉場が未経験である。山中の秘湯あるいは登山後の温泉入浴はもとより欠かせない楽しみであるが、時には温泉めぐり主体の旅行に出掛けたり出張の際に足を延ばして入湯しております。ついでに名所・旧跡を訪ね、その地の素朴な郷土料理が味わえれば万々歳！

#

本誌にも山に関する寄稿文や記事が時折掲載されておりますが、日頃ストレスを感じている方や、いわゆる団塊の世代で、これからいかに余暇を楽しむかを模索中（？）の諸兄には、是非とも一度野に山に出られんことをお勧めする次第です。（H17・9・20・記）

「廃用性萎縮」について

田中憲雄（柏原町）

六十八歳で右足首を骨折損傷した。

平成十四年二月二十七日、夕方十九時頃のこと。翌二十八日は病院関係が木曜日で休み。三月一日、N整形外科でレントゲン撮影、踝と踵上部二箇所の骨折が判明、ギプスで固定。三月四日（月）に市民病院に入院、Y整形外科医により外科手術した。病名は「右関節外踝骨折」であった。三月二十五日に松葉杖と共に退院した。

それにしても後半のリハビリセンターでのリハビリは厳しいものがあった。昼食後、実質一時間程ではあったが、毎日病室まで係員の人が連れ出しに来る。車椅

子に松葉杖を背負うように積んでエレベーターで通う毎日であった。初めのうちはギプスを着けた足に鉛の板を巻いて足の上下を十回から三十回位やるのである。重さは二kg、四kgとあるのを足に巻き、仰臥して足首から上に揚げる。出来るようになると鉛板を組み合わせて重量を増していくのである。骨折した右足と健康な左足とでは、太さが半分近くやせてしまっているから必要なリハビリであったのだろう。右足の指もグーとパーをやるようにして足首を床につけ、床に拡げた風呂敷を足指先で畳む運動もやった。

面会時間には、毎日家内が洗濯物の取り替えも兼ねて来てくれた。迷惑をかけたと思っている。二人の息子も心配して遠方から覗きに来てもくれた。

さて、退院して間もなく新聞で「廃用性萎縮」という医師の記事を目にした。外傷か老齢で通常、何げなく使っている四股を使わなくなった結果、「廃用性」の『脳』の「萎縮」が引き起こされ惚けが生ずることが多いと書かれてあった。惚けるにはまだまだ早い。リハビリウォーキングの重要性を再認識した次第である。

一日一万歩というけれど、一日四回位に分ければ痛いのを堪えて何とかなると思った。寒くなると痛みが強いので六千歩位のこともある。調子がよいと、一万二千歩位のこともある。

人間普段は何げなくやっている動作が、如何に大事で健康の為なのだと、いうことを思い知らされること、でもある。健康であることを有り難いと思わねばならないのである。

因みに、平成十五年平均の一週間の歩行歩数は一日七千八百八十歩、多い日は一万二百歩、少ない日で五千歩、寒い日や暑い日、天候の悪い日もあるので良しとせねばなるまい。

平成十六年、十七年も大体このテンポを守って歩いている。

思えば、カナダ・イタリア・ベルギー・ドイツ・チェコ・ハンガリー・フランス・スペイン・オランダと健脚の頃の旅行が楽しく思い出され、テレビの映像をあさり、懐かしんでいる昨今なのである。

折々の記(2)

井本義一（柏原町）

○記念すべき十六年十月二日（土）。ヒット二五七本、二五八本、二五九本目、大正九年来八十四年ぶりの快挙。イチロー伝説スタートの日にテレビ観戦し、静かに湧き上がる爽やかな感動、よくぞやってくれたと日本人として誇りたい気持だった。それと職人＝プロ、求道者としての彼が小さいこと（事前準備を含めて）を積み重ねて新記録の今があるとの言葉に感銘。渡米直後、彼に対し周りから「なんぼのもんじゃ」と言われたことに加えて、新記録達成へのワクワク、ドキドキの緊張感がたまらないと、楽しそうに言う彼は天才にあらず、努力の人だと思った。

わたしは来月末日をもって長い職人勤務を終える特別な感慨ありこの日を忘れない。（16・10・28日）

○「ようこそ（柏原へ）お帰りなさい。お待ちしておりました」十六年十一月十一日、駅前・喜作で挙行した、柏原中学校昭和二十五年卒業生（五十四年前）古稀記念同窓会幹事の一人Mさん手作り毛糸の食器洗いに添えられていたメモだった。なにげないメッセージにお世話いただいた六人の幹事さんの意気込みと周到さが感じられ、結果は当然のことながら内容（全員の記念写真と記念文集を当日配布持ち帰り）充実の大盛会だった。温かい気配りに感謝し、よみがえる懐かしさと喜びの一日であった。参加者の一人として仲間のみんなにありがとうの一日であった。（16・11・12日）

○四十年前の昭和三十九年十一月二十日、神戸銀行新小岩支店（葛飾区）開店スタート日。開店四十周年開設準備委員記念同窓会のテーブルスピーチで、当時新装なった支店内で長男（今四十一歳）を抱いてくれた女子新入社員の方々から「孫が生まれました。お婆ちゃんになりました」と近況報告を受けた。あれから早やそんなにとの思いと、その年も東京オリンピックの年だったと感慨を新たにした。（16・11・20日）

○延べ七時間の使い方、生き方をどうするか？　大切に使いたい。会社での拘束時間五時間と往復通勤時間2時間（ドアーツウードアー、各駅停車時間で）計7

時間の生かし方を実行する日が来た。平成十二年四月一日から四年八か月間、社員証と首かけ入室カードを昨日返戻し、わたしにとって三度目、最後の職場へ御礼とお別れをした翌日。（16・12・1日）

○町内一周ウォーキング（二・五キロ）途中で、ストレッチと筋トレをしている公園の広葉樹（特に欅）の状況を見ていると、樹木も来春の芽吹きに備えているのだと思う。毎朝見ていると樹木が自己判断するのか？　または樹質内に虫が入っての腐蝕なのか？　茂り過ぎる個所の調整なのか？　かなり太い幹もいつのまにか新芽の芽吹きもなく幹元から立ち枯れて、ある風の朝、幹元から地面に落ちている。毎季二、三箇所見かける自然現象である。

　わたしもこれまでの職業生活のしがらみや諸習慣を捨て去って、新しい時間と内容をシンプルに変えたい。（16・12・3日）

○束縛の会社時間から解き放たれての自由時間はいくらでもあるようでもあり、整理し捨て去ることに費やす時間が必要で、いざとりかかると時間が少ないようにも思われる。要は時間の質、中身の問題である。それは会社時間で勤め上げた対価に比すべきものでもあろうか。また、勤務時代は「整理」とは「捨て去ること」で割り切って捗ってきたが、家庭内の「整理物」はそうはいかない。愛着心、性別、血液型か性格の違い、それに加えて「捨てるのが惜しい」の貧乏性？が出てくると、結論が出にくく、時間がかかり、果ては夫婦喧嘩になる始末でなかなか捗らない。でも不要物の整理は将来に向けて是非しておきたい必要事だ。

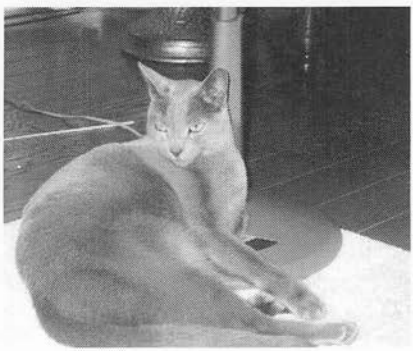
　自分のつつましい人生の流れのなかで、あと与えられた時間か判らないだけに、勤め続けている諸事に日々感謝しつつ大切にしたいと改めて思う。（16・12・6日）

○会社勤務時間の代わりに選択したものの一つボランティア。町内会の能が谷西緑地樹の会＝緑豊かな森をみんなで育てよう！子供達に贈る自然いっぱいの森＝に正式に本日入会させていただいた。杉、クヌギ、ケヤキ、ブナ等の樹林下の雑木と言っても主として竹笹の刈り取り除去作業で四五度～六〇度傾斜の山地で、鎌を右手で薙ぎ払い左手で転げないように樹木等につかまりながらの仕事である。初日早々怪我をしたらみっ

ともないとの思いが先ず頭をかすめる。絶好の晴天日で、暑いし普段使わない手足、腕等の筋肉を使っての踏ん張り、支える力をフルに使っての作業で、一杯一杯のきつい洗礼を受けた初日であった。ともかく鎌が切れないのには参った。

二・二時間で後半は鎌で切れない太目の雑木を鋸でカット専門役に。汗だく、フラフラで帰宅シャワーを浴びてボーとしていたら世話役代表のS氏が、椎茸がでたので（以前、臨時で菌植付け作業時に参加し手伝った実績あり）と自宅へお持ちいただき、妻と二人で採れたての新鮮な味を満喫させていただいた。ボランティア正式参加初日。（16・12・11日）

○年頭に。長年の勤務グセで習い性となったのか日々の作業動作を「勤め」に読み替えて、自然と安き＝怠惰へ流れる心（将来は引きこもりに繋がる）に自己牽制を敷いた。曰く（全てあとに「つとめ」をつけて）後ろ向き歩き・腕立て伏せ・スポーツジム行き（乗降車駅へ多摩丘陵下り二〇分と上り三〇分の約五〇分の歩行）・布団干し・家内外清掃・ボランティア・読みたい本の読書・青竹踏み・ケイスケと日向ぼっこ（ネコと人間双方の癒しとストレス解消に）・メールの基礎から活用・各種不要物（書籍、小説、参考ファイルから衣類、覆物なども含む）の整理廃棄・新聞記事のスクラップ作業・ケイスケの排便砂の清掃などなど、他人に言うのも憚れるようなことまでも掲げ、自分自身への「勤め」にしたい。会社勤めを離れて自分のためと、家族のために生涯現役、学習ということ。会社時と異なり束縛のない自己勤務感覚を持って、上記ほか日々掲げた諸メニュー（筋トレとストレッチ運動を加え約二五）を自由に淡々と、喜んで行うことに感謝し楽しみたいと思う。自己マニフェストの確立で、願わくば、今七十代から束縛のない自由な春秋を送りたいものだ。困みにマニフェストとはイタリア語で「はっきりと示すこと」。（17・1・12日）



○「首の後から肩への肉つきと背中腰の曲がり方がお母さんとそっくり、背筋を伸ばさないとだんだんひどくなるよ」は妻の弁。二年以上前から言われつづけている。

背中腰の曲がりは格好が悪く気になって仕方がないが、ＤＮＡには勝てないものなのか？　いつのまにか曲がっていて愕然とすることしきりの昨今。ついには後ろ向き歩きの時は胸ならぬ「背中を張って歩いているよ」と負け惜しみの反論も。（17・2・17日）

○わが国随筆文学史上の不朽作、鴨長明著『方丈記』を読み返した。この一月からＮＨＫテレビで「義経」が始まったが、作者の年譜で見ると平家滅亡（一一八五年）前後の史実を採り上げているのは天災地変、飢饉の記述である。歴史は繰り返すと言われるが、まさにその通りだと思った。

現代、内外での風水害、地震、津波、雪害に加えて、悪いことに人災が大問題で「人類よ何処へ？」と考えざるを得ない、悲しくどうしようもない現実。温暖化による地球諸地域での砂漠化、アフリカほか諸国での戦争（内戦も）の結果、飢饉による乳児と少児の連日の大量餓死、麻薬やエイズによる関連死の増加、頻発しているテロ、増加し続ける環境汚染、世界各地の難民問題などである。

いま、いつ関東へ直下型大地震が来るのか？　心の不安の増幅や、未来への閉塞感のなかで、上記名作の書き出し「行く河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、……」は、格調（先見性も）高く、また重く、心に「救いと祈りを」と迫って来るものを感じた。（17・3・8日）

○先月から駅より自宅まで第二の心臓と言われる足を鍛えるためにも、歩きながら口のなかで「イッシュン」「イッシュン」と言いながら、ここ多摩丘陵の坂道を歩いている。以前は一から一〇〇まで数えて繰り返し唱えていたが、「一瞬」の方が「形」より入るので良いと考えたから。一瞬の繰り返しが一分、一〇分であり、一時間であり、一日、一か月、一年につながる。語調も良く、唱えることで、今この一瞬一歩一歩の重みを忘れないように思い起こさせてくれるからだ。

今夏で満六年になる路上二キロの後ろ向き歩きの一

歩一歩にも採り入れ実行中である。昨年十一月末迄の五十年間の勤務時代は毎日全て数字の積み重ね競争をしてきた。もう今はその必要はないのだと思うのと、宇宙のなかの塵、芥のわがこれからの人生を考える時、「一瞬」はとてつもなく貴重だ。「歩行」のみにかかわらず、他のことにも一瞬、一瞬感謝しつつ大切に生きたいと思う。

（17・4・1日）

桜花満開、柿芽立つ平成十七年四月八日・記

グアム・ゴルフ旅行

足立　東一郎（青垣町）

初夏に、庭に移したハイビスカスが一・五mほどに育った。暑い夏を迎えた今、元気よく真紅の花を次々と咲かせている。

寒くなると鉢植えで室内へ、暖かくなれば、再び庭に植えかえながら育ててきた。五年以上になる。部屋の中でも咲くが、花の色が違う。暑い季節の花だ。

今年の七月、よりによって、常夏の雨季に入ったグアム島に旅することになった。

この企ては、長年、親しくつき合ってきたテニス仲間によるものである。同年代でもあって、「元気なうちは海外へ」と、仲間うちで費用を積み立てながら、既に二回実施してきた。

積み立て金も頃合いとなってきた今年、当番でゴルフ好きの夫婦が「海外でゴルフを」と、選んだのがグアムである。四組の夫婦、総勢八人のグアム・ゴルフ・グループツアー（四泊五日）となった。

グアムは、ゴルフ天国でもあるとのこと。淡路島ほどの大きさの島内に七つのゴルフ場。日本では一日がかりのゴルフも、グアムでは半日の手軽なスポーツとして人気があるとのこと。

雨季ではあるが、観光シーズンとなる夏休みを避け、七月初めの出発となった。このシーズンはプレー料金も格安とのこと。

宿泊は、日本企業経営のコンドミニアムに。広大な敷地内にコースがある。一部屋が、二ベッドルーム、一三五㎡と広い。グループに向いている。部屋には、生活に必要な設備や物も完備されている。

食料も日本から運ぶ計画をたてた。しかし、グアムへの食品の持ち込みは、加工品でも厳しいチェックを受けるとの旅行社の話。結果的には「お米」だけが残った。

女性たちの協力で、米以外は現地調達の材料で自炊することに。グアムには大きなスーパーマーケットがいくつもある。大概のものは手に入る。

成田からグアムへは時差一時間、実質三時間ちょっとで着く。ところが、入国審査が厳格で、全員両手の人差指の指紋と顔写真をとられた。（着いた日の夜、ロンドンで同時多発テロ発生。納得）

滞在五日間のうち三日間は施設内のコース（「レオパレス・リゾート・CC」かの有名なジャック・ニクラウスとアーノルド・パーマーが設定した。三六ホール）でゴルフを。一日は島内観光。

コースは起伏に富み、整備も完璧だ。自然を利用し

てフェアウェーの外は深いブッシュ、そこへボールが入るとまず探し出せない。谷越えのコースが多く正確なショットと距離が必要だ。グリーンは難しく読みきれない。苦労の連続であった。

一方、コースの周りには、沢山のハイビスカスが点在し、色とりどりの花がつぎつぎと我々を歓迎してくれる。青い空、強い日差しがコースのグリーンとともに、南国の印象を強烈にアピールする。目が痛くなるほど光が強い。

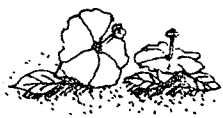
高い所にあるティグランドからの展望は、壮大かつ絶景。島全体に広がる密林に覆われた丘とはるかに広がる空。すっかり目を奪われてしまった。

ゴルフはスルー。早朝スタートで正午前後にはあがれる。プレー後は大浴場で汗を流すこともできる。途中でバナナ程度で腹を満せば、終ってからゆっくり食事をしても、時間はたっぷりある。昼寝、散歩、テニス、買い物、余裕である。

時季にもよるのか、グアムの至る所で出会うのが日本人観光客。いかに身近な島なのかがよく分った。因みに、島内の車の八〇%は、日本車とのこと。その理由は故障した時、部品を取り寄せるのに日本が一番近くて便利であるからとのこと。現地ガイドの話である。

グアムでの五日間、幸いにも天候にも恵まれた。名物のスコールも一度だけ経験した。同じ所に止まり、ゴルフ三昧と徹底して遊んだ。移動のない旅もいいものだ。何よりも、日常の生活から、時には、非日常の世界に身をおいてみることで、新鮮な気分になるのがいい。ささやかな贅沢と刺激が長い人生を豊かにするに違いない。次は、どこで、何を経験することになるか。早速、積み立てを始めた。

我家のハイビスカスも、もっともっと、南国のハイビスカスのように元気に育って欲しい。手入れをしよう。



草の根文化交流のその後

―NPO法人「アジアの新しい風」―

上　高子（氷上町）

二年前に、「アジアの新しい風」の設立目的、経緯、なぜアジアか、今後の活動について寄稿させていただきました。この二年間を振り返って原稿を読み直すと、思いつきで行動に移すタイプにしては、結構筋が通っていることに自分ながら感心しています。恐らく、このように原稿に書くという作業が、自分の内面を見つめ確認していくことになるのだと思い、今回もそのような期待を込めて再度寄稿させていただくことにしました。

◆草の根活動の中核――メイト交流

北京にある清華大学と第二外国語大学の学生計六〇名は、Iメイトと称する日本側会員とパートナーになり、日本語でメール交換をしています。会員は学生の希望に応じ、日本語の添削も行いますが、自身が日本語についてよく知っているとは言えないことに気づきます。その結果、日本語について関心を深めることになり、日本についての質問を受けて、もっと日本を学び始めるのです。（来年からはタイのタマサート大学が加わります）

今春、約一年半メールを交流していた会員（五八歳の女性）が突然死されました。Iメイトの学生が二人の間で交わされた一〇〇通にのぼるメールをすべて保存していたため、ご遺族と学生の了解を得て冊子として公開することになりました。ここには異文化、年齢差を超えて理解しあおうとする二人の魂のふれあいがあり、読者に深い感動を呼び起こします。二〇代の日本語学習者と五〇代の日本の主婦。二人がお互いを求め合うものは何か。学生にとっては、日本語の添削をしてもらえるという実利的なメリットもありましょう。憧れる日本についてさまざまな情報が得られるということも。実際一年半の間に学生の日本語は飛躍的にうまくなっています。主婦にとっては、人の役に立つというボランテイアの喜びがあったと思います。が、そ

れにもまして、自分が生きた青春時代を中国の学生に重ね合わせ、人生を振り返り、肯定的な評価を与えるという効果もあったのではないでしょうか。

これから団塊の世代の大量定年時代を迎えます。彼らにとって、このような日本語学習者への支援活動は、個人レベルでも、また異文化間の相互理解というグローバルなレベルでも意義のあるものになると確信しています。

◆行き着くところ「コミュニケーション能力」

―「お互い」ということ

日本人のコミュニケーション能力は世界レベルで非常に低い、ということがあちらこちらで露呈しつつあります。「あ・うんの呼吸」や「もの言えば唇寒し」の文化的背景があり、それはそれで一つの特長ではありますが、対外的には理解されにくいでしょう。思ったことを的確に口にすることができる、という表現力を磨く必要があります。しかし、それだけでは不十分です。相手の言い分を聞く、相手の思いを受け止める、という双方向の触れ合いがなくては本当のコミュニケーションとは言えません。われわれNPOはそのことに着目して、会員のコミュニケーションの能力を磨く場を提供していきたいと思っています。

ある初老の男性会員は、Iメイトの学生から中国語を習っているそうです。一方的に日本語を教えるというのではなく、中国語を教えてもらうことによって、学生も役に立っているという実感がもてます。また、男性は、外国語で作文をすることの難しさや時間がかかることを体験するので、相手の学生が日本語でメールをくれることにより感謝をするようになったということです。

◆イラク戦争が教えたこと

このNPOは日本語学習者支援という活動をしていますが、究極において平和運動にほかなりません。価値観の異なるもの、利害の異なるもの同士が違いをいかに調整するか、それを対話による相互理解によって実現していく試みです。「そんな甘いこと。世界は弱肉強食で構成されており、戦争はなくならない」と言ってはばからない人は大勢います。

確かに、人間は自己保存の本能を根深くもっていて、自分を攻撃するもの、自分の存在を脅かすものに対峙して生きています。「攻撃は最大の防御」と称して、時として過剰防衛をし、心許せない相手には猜疑心に満ちた憶測をします。強者や既得権益を持つものには特にその傾向があります。私自身、正直に自分を顧みて、どこまで既得権益を譲れるか、という葛藤に悩むことはあります。

しかし、弱肉強食を反省なく肯定するのであれば、弱者の抵抗、報復は必至です。イラク戦争の傷跡はいつまでも残り、繰り返し悲劇の温床となっていくことでしょう。米英軍が武力による制圧に失敗している現実を見ても、戦争という手段による紛争の解決が、最終的な問題解決をもたらさない、ということを世界中の人々は感じています。

いまや国益ばかりをうんぬんしている時代ではありません。真の草の根交流を通して、地球益を希求していく時代になっていることを各国の指導者たちは認識し、NGOの働きを支援して欲しいものです。

◆丹波関係の会員

現在会員は一三〇名ほどですが、丹波市在住と在京の丹波出身者で会員全体の一割を占めています。「アジアの新しい風」が丹波というローカルな地域に吹くというのも面白い現象ですね。郷友会からもぜひ参加者が増えることを期待しています。ご関心のある方は、ホームページにアクセスしてみてください。

http://www.npo-asia.org

旅行記

奄美の旅

生田清弘
（柏原町）

今年は台風の発生が多く、いつもより本州に近づいたり、或いは上陸した台風の被害が多かった。九月二九日、台風二一号が鹿児島・高知に上陸したあと、大阪に再上陸して、三〇日には東北方面に抜けた。また、一〇月九日には台風二二号が関東地方を通過して、各地に大雨をもたらし、続く二三号も日本海側に大きな爪跡を残した。このような状況の中、私は南九州方面の旅に出るため、天候に不安を抱きながら準備に追われていた。旅行を決行するかどうかは出発当日の一〇月一二日早朝の天候次第であった。

まだ薄暗い中、品川経由羽田へ向かった。どうにか心配した天気も平静を保ち、定刻九時奄美大島に向けテイク・オフ。機中、たまたま隣に乗り合わせた奄美大島出身の婦人と話が弾み、いつの間にか大島の観光についての助言を受ける形で話が進んでいった。大変収穫の多い話で私たちのこれから始まる旅行にとても参考になり感謝している。こんなわけで二時間余りのフライトもあっという間の楽しいものになった。

この度の旅行は、私の傘寿と妻の喜寿を共に祝い、良い想い出をつくると同時に、この島ではいろいろ「若さ」や「技」にも挑戦できそうなので「体験旅行」と銘打って老齢をも省みず、はじめての試みにも元気を出してやってみようと思っていた。さて、どうなることやら。

迎えのタクシー・ドライバーに事情を説明し、予定していた観光スポットの順序を入れ替えたり、チャージの追加や、ホテルのチェック・インタイムの変更、場合によっては観光先の体験予約の申込みなどを車中で相談しながら、一番遠いところから島巡りをすることにした。

#

途中、酒造会社を見学させて貰うことになり、黒糖焼酎の出来るまでの工程を、順序に従い見てまわる。黒糖を原料とした酒類の製造は、この島のみで認めら

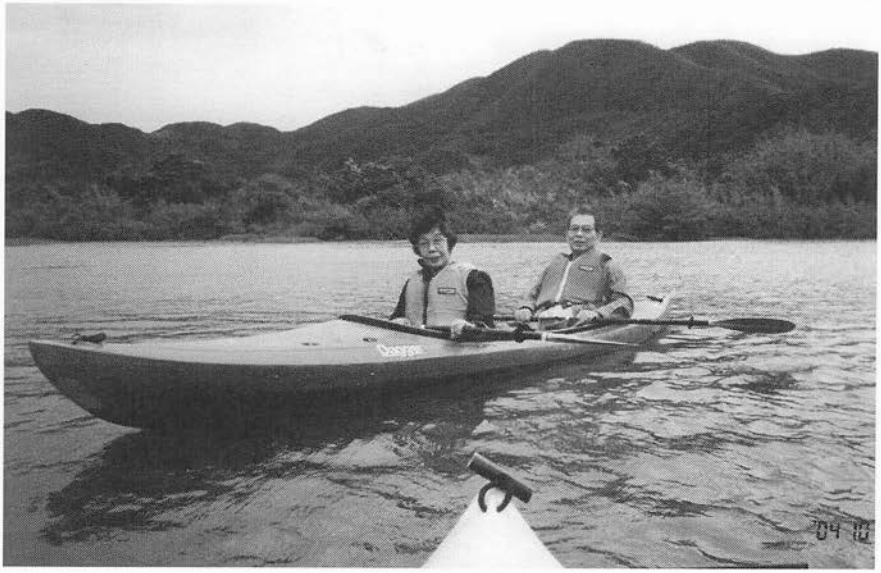
れているもので、全国的にも貴重であり、まろやかさと高級感が特徴の栄養素の高い「長寿の酒」として有名。隣のレストランでは、各種の製品が陳列され、試飲もできる。度数の違う焼酎を水割り、オン・ザ・ロック、ストレートなど、少しずつ飲んでみる。最後は原酒を試みたが、これは確かにきつかった。

このあと食堂に移り、奄美の郷土料理を代表する鶏飯を注文する。およそ四〇〇年前に、薩摩の役人をもてなすために考案された料理で、具は細かく裂いた鶏のささみ肉を中心に錦糸卵、シイタケ、パパイア漬け、海苔などが主流で、自分の好みに合わせてご飯にのせ、熱い鶏だしのスープをかけお茶漬けのようにして食べる。鶏は自営の養鶏場でヒナから育てるこだわりようだ。味はあっさりしていておいしかった。

#

最初の目的地は黒潮の森・マングローブ・パーク。空港から直行すれば車で約一時間半位か。幾つかの山越えがあり、トンネルも多いが、いわばこの島の幹線道路を走る。名瀬市以外はところどころに村落がある程度で想像以上に大きな島だ。佐渡に渡った時も同じような印象だったが、見ると聞くとは大違いといったところ。国内第二の規模という住用村のマングローブ原生林は約七〇万平方メートルの広さがあり、その一角にマングローブ・パークがある。マングローブとは熱帯・亜熱帯地域の海岸沿いの海水、淡水の入り混じった場所に生育する植物の総称だという。パークの中心部にあるマングローブ館に入ると、天然記念物のアマミノクロウサギの剥製や、この島だけに生息しているリュウキュウアユを水槽で見ることができる。マングローブ原生林とリュウキュウアユなどを育む住用村の自然の中で、動物や植物と親しむことを目的とした自然回帰型の公園施設は、マルチスクリーンやジオラマ水槽などにより多くの人々に感動を与えている。ここで習得した予備知識をもとにマングローブ・パークのハイライト、カヌー・ツーリングに向かった。

私たちが参加した時間帯は幸い混雑することはなく、参加人員は総勢六名。インストラクターの青年が、まずライフ・ジャケットの着け方を皮切りに、手際よくパドルの使い方を教えてくれる。準備体操を兼ねてカヌーの漕ぎ方の練習を地上で行い、次いで直進、左・



カヌー特訓（休憩中）

右旋回、停止と、カヌーが座礁した時の脱出の仕方など、カヌーをゆっくり走らせながらの実習が続く。カヌーは一人乗りと二人乗りがあり、私たちは二人乗りを選んでいたのでこの場合、二人の協調もポイント。いざ、インストラクターと離れ私たちだけで漕いでみると、水路も広くカヌーも少なく、思ったより身軽に進めそう。でも夢中になって進むうちに進路が曲がったり、広い筈の川幅の側方に片寄ったり、中洲を避けようとして慌てたり、次第に悪戦苦闘の兆しが見えてきた。そのうちに一度ならず二度、三度と座礁する羽目になる。手を大きく動かし、ゆっくり漕げば楽になり、余裕も出てきて景色を楽しめるようになることを会得。暫く進むと、川の両岸にマングローブの密林が現われ、いわゆるトンネルに差し掛かる。おおよそコースの半分位の地点だ。この辺りで休憩するため、カヌーを岸辺に寄せて止める。マングローブ林の足元をよく観察すると、小さな穴が沢山あいていて人の気配を感じた小さなカニが急いで次から次へと隠れていった。その中に、シオマネキという片方のハサミが大きくて、手招きしているような仕草のカニを見ることが出来た。

改めて、奄美の自然の中で、動植物と親しむ実感を覚えたところで、Uターンして帰路に着く。帰りはカヌーにも慣れたせいか割合スムーズに操ることができ、妻は日頃プール通いをしていることもあって、水に対する感覚も私よりかなり上のように感じた。ようやく慣れた頃には舟着場が待っていた。言い訳ではないが、この調子でもう一時間も乗っておれば、間違いなく一人前には程遠くてもかなり上達したと思う。ともあれ、遠くまで足を運んだ甲斐もあり、一時間のこのカヌーツアーの楽しい思い出と、やり遂げた満足感を満喫した。

#

帰途、名瀬市にある田中一村画伯終焉の家に立ち寄る。一村は五〇歳で奄美大島に移り住み、紬染色工として生計を立て、蓄えができれば絵を描くという生活を繰り返し、島の自然をモチーフにした作品を描き続けて、六九歳で生涯を閉じた。一村が晩年を過ごした家がここだ。

その生き様が伺える小さな家だが、彼は「御殿のようだ」と言って愛したという。この家の近くの田の中で、何か染め物をしているらしい人を見つけた。力仕事のようで話しかけるのも憚られたが、近づいて「染めものですか」と尋ねてみた。染めものを両手にもって絞っていた職人は顔をこちらに向けて、「これが有名な泥染めですよ」と答えた。傍らのドライバー氏は「お客さん、今日はついてますよ」と。そのわけは、通常、泥染めの見学は観光施設以外では、このように運よく現場の職人に出会えることは稀で、予約しておかないと無理。それも職人はその日の状況により、あちこちの泥田を渡り歩くというからなおさら難しい。この地で生まれた泥染めは奄美の代表的な大島紬の染色法の一つで、明日、改めて大島紬村で勉強する積もり。

#

今夜は、赤尾木湾に面したリゾートホテル・カレッタに宿泊。暫く休んでから、プールサイドのバーベキューで夕食。日が沈むと、プール、レストランなどのライト・アップの光が水面に揺れ、それとバーベキューのガステーブルの焔が交錯して素晴らしい夜景を演出。

採りたての新鮮な魚介類を食べながら今日一日の出

来事を話題に話は尽きそうになかった。振り返ってみると、なかなか効率的な動きで充実した一日だったと思う。黒糖焼酎の認識と鶏飯の由来と食感、黒潮の森・マングローブパークでの奄美の自然とのふれあいとカヌーの初体験の感動、田中一村の終の棲家と追想、大島紬泥染め職人との偶然の出会いなど、いずれをとっても私たちの心に残る思い出となるだろう。

#

翌朝は少し早目にホテルを出て、西郷隆盛が過ごした「西郷南洲謫居跡」を訪れた。安政の大獄で一命を取りとめた西郷隆盛が一八五九（安政六）年から三年間生活をした場所で、彼はここで村人や子供たちに、読み書きなどを教えながら静かに暮らしていたといわれる。跡地に建てられた「愛加那碑文」には次のように妻子のことが刻まれている。

「一八三七（天保八）年、愛加那は龍一族の二男家、佐栄志の娘として生まれた。少女期から芭蕉布を織りはじめ、やがて村の女たちに教えるほどの腕前となる。気丈で働き者であった。

一八五九（安政六）年、鹿児島から遠島になった西郷吉之助（後の隆盛）と結婚し、この家で暮らす。菊次郎と菊草の二児に恵まれたが、三年後、吉之助は島を去り、やがて二人の子も西郷本家へ引き取られた。

吉之助は明治維新の立役者の一人として歴史にその名を残した。愛加那は、この家でひっそりと暮らし、ひたすら夫と子らに会う日を待った。

一九〇二（明治三五）年八月、大雨の中を畑仕事に行き、そこで倒れた。享年六六歳。愛加那は島妻の生涯を終えた。

愛加那没後百年を記念して二〇〇三（平成一五）年一二月二五日建之

龍　マサ子」

西郷隆盛は周知の大人物であるが、その陰にあって妻、愛加那の離れ島に残された生涯は、さぞかし寂しいものであったに違いなく、心を打たれた。

#

「大島紬村」は南国のハイビスカスやブーゲンビリアなどの花咲く豊かな自然公園の中で、天智天皇（西暦六六一年）の頃から受け継がれて来たという奄美古

代染めの技法をはじめ、白い絹糸から大島紬が出来るまでの全工程を楽しみながら見学することが出来る。はじめに、「泥染め発祥の地」（天の川伝説）を紹介しておこう。

「大島紬は天の川で染めます。昔、赤尾木の地に天から白馬が降り立ち美しい湖が出来ました。ここから湧き出る水が、絹糸を美しい色に染めたと言い伝えられます。天の川から（天馬）彗星が降下し、土となり、泥染めの染料として、大島紬のやわらかくしっとりとした風合いを作り出す独特の染色技法を生みました。」（泥染め発祥の地・大島紬村資料より）

製品の出来上がるまでには全部で五〇〇工程という気の遠くなるような作業を伴い、完成までに半年から一年もかかるものがあるという。園内では、木の葉の腐葉土を混ぜた泥田に布を染み込ませる泥染め作業や車輪梅（シャリンバイ）の染料を使った藍染め作業が体験できる。車輪梅はバラ科の常緑低木で暖地の海岸などに自生。高さ2メートル位、樹皮は紬の染色に用いられる。

#

私たちは、時間の都合もあり藍染めに挑戦することにした。職員から藍染めの手順について説明を受け、染剤の入った大きなバケツ様の容器と、ゴム手袋、エプロンを受け取り装着する。作業台には、糸とハサミ、それに束縛に使う数種のテープが並ぶ。作品はTシャツ。

まず教えてもらった通り、Tシャツに入れる模様をイメージして、藍地に右肩から左斜め下にやや太目の白い筋模様を作り出すことを考える。この作業は思うほど簡単ではなく、生地を摘み、相当の力を入れて筋線に沿って糸を巻き付け、或いは幅広のテープなどを使って幅に変化を与えながら、締め付けていく。模様に濃淡をつけようとすれば白く残すところはきつく締め上げ、染色時染料の入り込む余地のないようにシャット・アウトする。ボカシなどは手加減で緩めたり、模様が単純にならないよう気を使う。線が一本では面白くないので職員のアドバイスにより、もう一本入れることにする。位置は左肩を円で囲むように一周させてみた。妻の作品もTシャツで、縦に二本線を平行に走

藍染めに挑戦

らせる構図で職員の手を借りながら、何とか作業は進んでいった。バケツ内の染料を満遍なく行き渡らせるため、よく混ぜながら三、四回染めたところで、仕上げの乾燥を職員に依頼し、一時間後に戻ってきて、締め付けておいた糸やテープを取り除く。段々模様が現われて来るのを見守る。この時、胸がときめき感動を覚える。初体験の楽しさを実感する一瞬だ。模様の線は太かったり、細かったり、筋の通りが良かったり、悪かったりで適当に変化している方が面白い。やはり正直なもので、固く締め付けたところの白抜きは藍色の地にくっきり浮かびいい感じに仕上がっていた。ボカシというより締め付け加減が悪く滲んでいるところが多い。昨日、泥田で出会った職人を見て感じたことは、田の中で立ちッ放しで糸や布を絞る時など足腰に力を入れる作業と見受けたが相当の重労働ではないかと思う。今日、染め作業をほんのちょっと体験しただけで本職の苦労が分かる筈もないが、このような地道な基本の作業があってこそ、立派な製品が出来上がるのだという認識を新たにし感銘を受けた。「泥染め技術保存館」には、一〇組位の絹糸染め見本が天井から吊り下げられ、それぞれの見本の染め工程を説明した短冊が吊してあった。シャリンバイ染四回、同八回、同一六回、同二〇回、シャリンバイ二〇回・泥田一回、シャリンバイ八〇回・泥田五回、染上がり絹糸（泥大島）などと書いてあったが、その工程の厳しさが印象的だった。

続いて、デザイン室では図案の製作を、締・加工工

芸館では糸から製品への織り工程（加工室・手織室など）を見学した。最後に製品展示場に入り数々の製品を見て、多種多様の製品が並ぶ中、手触りの紬のソフトで、軽い感触は抜群で他に例を見ない魅力を覚えた。

製品の出来上がるまでの染めと織りの繰り返しの各工程の作業に携わる人々の地道な努力と熱意に敬意を表し、この文化遺産が立派に継承され、今後ますます発展することを望みながら村を辞した。

#

次なる目的地、奄美パークに行き、「田中一村記念美術館」を見学した。美術館は常設展示室として高床式の高倉風建物が三棟ある。第一展示室には幼年期から千葉寺時代の作品、第二展示室には千葉時代から四国・九州の旅・奄美時代の作品、第三展示室には奄美での作品がそれぞれ展示されていた。館内には一八二点の収蔵品があり、年四回展示替えを行い、常時45余点が展示されるという。

昨日、一村の「終の棲家」を訪れ、感慨一入であったが、当美術館資料によれば、「一九〇八（明治四一）年、栃木県に生まれ、幼いときから天才的な才能を発揮し、中学（旧制）時代までに南画家として知られた。一九二五（大正一五）年、東京美術学校入学後、三ヶ月で中退。将来を嘱望されながらも中央画壇とは一線を画し、五〇歳の時に奄美へ移住」とある。

「奄美の杜シリーズ」の「ビロウとブーゲンビリア」、「ビロウとアカショウビン」などは、代表作としてその構図の妙、光と色彩の調和、繊細なタッチは見事という他はない。その他、「アダンの木」、「クワズイモとソテツ」、「ダチュラとアカショウビン」の三点は、一村を語る上で欠かせぬ重要な作品だが、個人所有のため、複製が展示されていた。これらの作品は、いずれも五〇～六〇歳台の作品のようだが、「逆光の画家」ともいわれる画家の最も円熟した時代の真骨頂の作品で、その気迫に圧倒される。

「私の絵がヒューマニティであろうが、悪魔的であろうが、画の正道であるとも、邪道であるとも何と批評されても私は満足なのです。それは見せるために描いたのではなく、私の良心を納得させるためにやったのですから……」（田中一村の手紙より）

とあるが、彼の面目躍如たる作品群であった。

序でながら、田中一村とゴーギャンについて触れてみる。この二人はよく比較されるという。この二人の共通点を私なりに見出してみる。年代的には、ゴーギャン没後に一村は生まれている。ゴーギャンは、ゴッホと共同生活を送ったアルルや、一〇年余り滞在したタヒチ島で数多くの傑作を描いた。一村も三〇歳で千葉に移住し、千葉時代には千葉寺の生活や身近な自然を描き、また九州・四国に旅して、明るい躍動感に溢れた作品を残し、奄美への弾みをつけたといわれる。そして奄美でのおよそ二〇年の不遇な境遇の中で、この島の自然をこよなく愛し描き続けて、新境地の一村芸術が開華した。

こう見てくると、両者とも人生の歩みの中で、その晩年を大洋の離れ島で過ごし、それぞれの画業を確立したといえるのではないか。加えて、ゴーギャンがマルキーズ諸島のドミニカ島で不遇と孤独のうちに死去したのに対し、一村も誰にも看取られず独り生涯を終えたことまで似ている。

空港に向かう途次、「ばしゃ村」に立ち寄り昼食。太平洋に面したシーサイド・リゾート地で、目前の白砂ビーチが眩しい。ヤシの葉で葺いた高床式のあずまやがビーチに点在する南国ムードに満ちたところ。

いよいよ奄美の旅も終わりに近づき、大島東北端の太平洋に突き出た岬「あやまる岬」経由空港に向かう。この岬から、晴れた日には喜界島まで見ることが出来るという。起伏する地形が綾織りの鞠に似ていることから、「あやまる岬」と呼ばれるようになったとか。ソテツ、アダン、ハイビスカスなど色鮮やかな熱帯植物が群生し、その先は白い砂浜と珊瑚礁が大きく広がり南国の光を受けて海は七色に輝く。一見の価値あるスポット。

慌ただしいスケジュールであったが、二日間の奄美の旅を終えて次の目的地、鹿児島・桜島と薩摩半島を訪ねるため鹿児島空港へ飛び立った。(二〇〇四・記)

集まれ丹波の元気人

小田晋作
（丹波新聞社社長）

八月末、丹波市春日町で「情報コミュニティミーティング―集まれ地域の元気人」という会合が開かれ、丹波地域でＩＴを使って先端的な活動をしているグループが語り合いました。東京から来た地域サイトの代表も参加。これから地域サイト同士が連携することにより、ＩＴが地域おこしの有力な手段となる可能性を秘めていることを、改めて教えられました。その模様をお伝えします。

◆

基調講演した長坂由佳さんは、新宿近郊の笹塚、幡ヶ谷など十商店街（約七百店）が都心に客が流れてしまうのを食い止めようと、六年前に立ち上げた「ささはたドッとコム」というサイトの仕掛け人。個々の商店のＰＲにとどまらず、地域内の病院、幼稚園・保育所、図書館、プール、福祉施設などの情報を、住民の視点でこと細かに掲載し、重宝がられています。

店主だけでなく読者もコンテンツ制作に関わることで、疎遠になりがちな都会にあって商店主、地域住民が〝同じご近所さん〟として顔見知りになり、アンケート調査でも「知らなかったお店を知ることができた」、「地元の商店を利用するようになった」、「街への愛情を感じるようになった」といいます。

商店街をはじめとする「地域サイト」は全国にあまたあるものの、「ささはた」のように一応成功と言える事例はまだ少ないようですが、長坂さんによると、「大繁盛しているオンラインショップの一九九六、七年頃の段階にあるのでは」とのこと。

今後、何を誰に伝えるのかという戦略を明確にし、マーケティングを進めながら、地域サイト同士が思い、目標を共有してネットを組んでゆけば、〝何もない町〟でも〝おらが町〟、つまり他の多くの地域から注目を浴び、誇り、愛着を持てる町に変身できるような舞台、仕掛け作りができるというのです。

集合した丹波の元気人

さて、丹波地域からトークセッションに参加した〝元気人〟は、篠山で自然エネルギーの活用など環境をテーマとしたまちづくりを進める「新しい風プロジェクト」、丹波市中心に地域通貨を使ってボランティア活動を展開する「丹波まちづくりプロジェクト」、バイオマス発電の実用化や里山づくりに取り組む氷上町の「バイオマスフォーラムたんば」、〝日本一の田舎〟作りをめざす青垣町の「東芦田まちづくり協議会」、田舎の何気ない風景や自然界の営みなどを動画で発信する春日町の「シフトアップかすが」、それに〝超お役所サイト〟として知られる篠山市役所の面々。

これらのグループ、団体の活動について関心のある方は、ホームページをのぞいていただきたい（別表参照）と思いますが、いずれも時代を先取りするものばかり。それぞれにＩＴを活用した発信により、活動の輪を広げつつありますが、資金、人材面等々の制約もあり課題は山積、試行錯誤しながら奮闘しているのが現状です。

しかしながら、「地元の人が何気なく見過ごしていたものの中に、実はすごいことがある。外部の人にも観光名所的な価値観でなく、日常の中に潜んでいる価値観を再認識してもらうことが大切」（「シフトアップかすが」の小橋昭彦さん）、「都会の人を〝お招きする〟のがこれまでの交流だったが、自分たちは対等の気持ちで進めている」（「東芦田まちづくり協議会」の長井克己さん）などの発言は、新しい価値観作りをめざすという点で示唆に富み、長坂さんの基調講演にも通じるものでした。

長坂さんは、全国のこうした地域サイトがノウハウを持ち寄り高め合ってレベルアップし、ネットワークを組んだ上で、「地域」というマーケットを構築していくことを展望しています。具体的には、例えば地方の産直品を都心のサイトで販売したり、都心のサイト受信者を地方に送り込んで、新しい価値観に触れてもらうといったことでしょう。

日本の社会では今、都会の文化、価値観があふれ、田舎もそれに席巻されがちですが、少子高齢化に向かう中で、地域サイトのネット化はやや大げさに言えば、その流れに一石を投じる、すぐれて文化的な運動と言えるかもしれません。

とは言え、サイト上の交流は、やはり人と人の顔を付き合わせた交流によってこそ、実質を持てるものです。その意味でも郷土出身者の集まりは、丹波地域の活動グループにとって、従来にもましてパートナーとして期待されます。丹波新聞や『山ざる』誌などの媒体も、こうした動きに柔軟に対応していければと思っています。

◆**新しい風プロジェクト**（篠山市河原町）http://blog.livedoor.jp/newwind/
環境を大切にしながら、自立できる地域、持続可能な循環型地域社会をめざす。自然エネルギーの導入、環境に配慮した生活提案などを進める「風のがっこう」を運営。

◆**ＮＰＯ丹波まちづくりプロジェクト**（丹波市氷上町） http://mito.tamba.tv/
ゆるやかで温かいミュニティの再生をめざし、助け合いのネットワーク化のツールとして地域通貨「未杜（みと）」を発行。カードのほかＩＴ未杜も取り入れる。

◆**ＮＰＯバイオマスフォーラムたんば**（丹波市氷上町） http://bf.tamba.tv/
木質バイオマス発電の技術研究に取り組むほか、氷上町谷村で里山整備を進め、「丹波の木こり養成」講座、森林療法講座なども展開。

◆**東芦田まちづくり協議会**（丹波市青垣町）http://higashiashida.com/
七つのグループが独自に取り組む村おこし活動をとりまとめる。自然との、農林業との、人との「関わり」で支えられた地域のイメージの持つ懐かしさへの反応を期待。

◆**ＮＰＯシフトアップかすが**（丹波市春日町）http://www.shiftup.jp/
田舎の日常を素材にした「田舎テレビ」により、都市の人々のこころのふるさと作りを進める。地域内では「里山ウォークデイ」や「村の小冊子」作りを展開。

『破戒』のモデルを尋ね長野から見学団

柏原町

旧制柏原中学校（現柏原高校）の二代目の校長で、島崎藤村の小説『破戒』のモデルと言われる大江礒吉の足跡をたどろうと、長野県飯田市の礒吉の出生地の近所に住む住民たちが六日、柏原高校などを訪れた。校内や柏原町内のゆかりの場所などを見学、地域の偉人に思いをはせていた。

礒吉が生まれた飯田市下殿岡区の田中吉男区長ら十七人が来校。飯田市からの視察は過去にもあったものの、地元区が訪れるのは初めてだという。

元同校教諭で、大江研究者の荒木謙さん＝市島町梶原＝が案内役を務めた。校内では、礒吉が校長室として使っていた、現在の柏陵会館や、礒吉が校長を務めていた当時から生えている、同校のシンボル・大クスノキなどをながめるなどした。また、礒吉が下宿していた、現在の柏原町観光案内所なども訪れた。

同区では、大江礒吉記念館の設立をめざしており、福知山市の芦田均記念館も訪れ、設立の経緯や運営方法などを詳細に聞き取った。

田中区長は、「実際に柏原を訪れてみて、歴史のある町だなと感動した。大江先生の偉業に触れることができ、いっそう鮮明に人物像が浮かび上がってきた」と感激していた。

（平17・2・10日付）

野口雨情直筆の「柏原小唄」見つかる

柏原町

作詞した「柏原小唄」を一節ずつみずから書いた歌謡詩人、野口雨情の書が見つかった。柏原小唄は十二節あり、これまで三節の書の所在が不明だったが、そのうちの、

「庭の老松ァむかしの名残り
今もしのはす御殿跡」

が見つかった。

「七つの子」などの名曲で知られる雨情は昭和十年代、童謡や民謡の普及に全国を巡った。そのころ観光開発に力を入れ始めていた柏原町は、柏原小唄の作詞を雨情に依頼。昭和十一年（一九三六年）、同町に招いた。雨情は三日間滞在し、作詞すると同時に、歌詞を半切の画仙紙に書き、関係者に配った。

見つかった書は、柏原町の旧家にゆかりのある町外の民家から出てきた。「雨情」の落かんがあり、保存状態は良好だった。

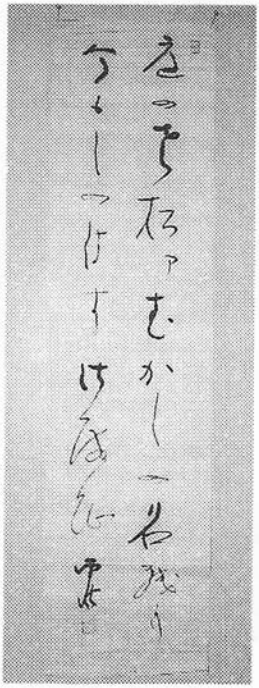
雨情の書を探し、今回の書を雨情のものと確認した同町の竹内脩さん（62）によると、残り二点の不明の書は、

「咲いて見事な桜の蔭に春の花見は鐘ヶ坂」

「天の橋やら雪さえかけて鬼の架橋見え隠れ」

だそうで、「どこかに必ずあるはず」と話していた。

（平17・5・15日付）



新たに見つかった柏原小唄の書

丹波市の名産に黒ごま栽培広がる

氷上町

黒大豆や黒米などと合わせ、健康食品の「五黒」の一つに数えられる「黒ごま」の栽培が、丹波市氷上町西地区を中心に広がっている。今年初めて三十人ほどが栽培に取り組んでおり、収穫期を迎えている。全国的に有名な篠山市の丹波「黒」大豆にあやかり、「黒」ごまを丹波市の名物にしようと、模索を続けている。

美容関係の仕事をしている辻長治郎さん(66)＝氷上町中＝が栽培を呼びかけ、知人に種を配った。丹波市誕生後、全国に名が売れる特産をと模索していたところ、「丹波と言えば黒大豆。黒にあやかり、黒ごま栽培を」と勧められ、大阪市にある創業百年の老舗ごま問屋を紹介された。同社から種と栽培管理の方法を教わり、栽培を始めた。

黒ごまは、国内に産地がなく、ほぼ全てを輸入に頼っている。食への安全指向の高まりから、ごく少量栽培されている「国産黒ごま」のニーズは高く、高値で取引されており、「丹波市産」の黒ごまも、同社が全量買い取りを希望しているという。

〈黒ごま〉活性酸素を退治し、体の酸化を防ぐセサミンや、ビタミンEを豊富に含む。美容に効果があるほか、動脈硬化の予防や肝臓の働きを助けるなどの「効能」があるとされる。(平17・5・15日付)

丹波市の「住みよさ」全国の四一九位

丹波市

東洋経済新報社が独自の指標で国内全ての市の「住みよさ」をあらわす「住みよさランキング」で、合併により初めて調査対象となった丹波市は四一九位に、篠山市は三八四位に位置付けられた。調査対象となった市の数は七四一。両市とも、全国平均に一歩届かない「成績」だった。(平17・5・15日付)

丹波市のPRポスター全国の各駅に掲示

丹波市

丹波市は、観光客が多い秋のシーズンに合わせ、市をPRする観光ポスター(B1判)を作成した。十月一日から十九日まで北海道から九州までのJRの九四七駅に順次掲示し、市の知名度アップと誘客をはかる。

「織田信長、足利尊氏が蘇る歴史文化の宝庫　悠久の時を経て丹波市は生まれた」と記し、名所・旧跡を紹介。白黒を基調とし、柏原八幡神社の参道と石龕寺山門にある国の重要文化財・金剛力士像を大きく配置。加えて、独鈷の滝、白毫寺のたいこ橋、高源寺と円通寺のもみじ、黒井城址、足利まつりのカラー写真を掲載している。市内の観光入り込み客のうち三割が十月、十一月に集中しているという。(平17・9・8日付)

■会員が書いた本

上　高子著
『井戸と大海―ハッピーミディアムをあきらめない―』

言うまでもなく、あの諺が本書のタイトルになっている。若い頃によく聞かされ、劣等感と期待感がない交ぜになっていた青年期の心情でもあった。すり鉢の底のような丹波盆地は「井の中の蛙」を自覚させる上で恰好のシチュエーションであり、それゆえに「海外雄飛」に夢を抱かせる跳躍台にもなった。

著者の母は、娘が勉学に怠けたり、慢心したりすると、この諺で叱咤激励したという。その母自身も、中国・大連に生まれ、英語を学ぶために単身、船で女子英語塾（現・津田塾）をめざした行動派でもあった。

著者も「大海」を見るために大学英文科に進み、航空会社に入社して社会への第一歩を踏み出すが、著者のその後の人生を大きく変えたのは、二人の子供を育て終え50歳になろうとしたときである。家族の応援を受け日本語教師として1年間、アメリカに滞在し、さまざまな異文化に接した。その体験は、帰国後に『子育てのあとアメリカがあった』（主婦の友社）として出版されたが、この行動派の著者をして「大海」を見るに十分な体験であった。

副題にある「ハッピーミディアム」は、そのときのホームステイ中にホストマザーから聞いた一言である。その夜、ご主人宛の手紙にこの言葉の感動がしたためられている。

〈今日、ルビーからとてもいい言葉を教えてもらいました。「ハッピーミディアム」です。（中略）相対する事柄について両立点を探ること。ここで肝心なのは、足して二で割ることではなく、双方がハッピーである頃合の折り合い点を見つけること。これが異文化交流のキーワードだと思います〉と。それは複雑になった人間関係をハッピーに保つ上の知恵でもあろう。

この言葉も使い方によっては「いい加減」になる。著者も自戒を込めながら「ハッピーミディアムをあきらめない」と主張する。〈対立することがらに辛抱強くハッピーミディアムを追求したら、もう少し住みよい社会、平和な世界になる〉と。

現在、著者の目は欧米からアジアへと注がれている。2年前にNPO法人「アジアの新しい風」を立ち上げ、アジアの多元的価値観を世界に発信したいと活動中である。（池田）

■郷里について書かれた本――

青木　慧著

『山猿流　自給自足』

創元社　発行／定価1700円

著者の青木　慧氏は、昭和29年柏原高校卒の同級生である。10年前まで千葉・八千代市に住んで、フリージャーナリストとして活動を行っていた。その間に『トヨタその実像』『日産共栄圏の危機』『IBM欠陥パソコン』と世界企業を告発する本などを出版し、その数20数冊に及んでいた。それが10年前、還暦を迎えるや、さっさと自宅を引き払い、市島町の郷里に舞い戻ったのだ。彼の東京での華々しい活動を知る者は、なぜ？と呆気にとられ、ついに隠遁生活か？と勘ぐった程である。

ところが、この移住は人並みはずれた強靱な意志と鍛え抜いたジャーナリスト魂によって周到に用意されたものであった。それは、市島町市ノ貝の耕作放棄の棚田を借り受けテントを張って、自力で自宅を建築するところから始まる。居宅を完成すると、そこを「山猿塾」と名づけ、大自然の生態系に学ぶ人間の暮らしの第一歩を踏み出す。

この10年の間にも「農」と「脳」の兼業を怠らない。「脳」の成果は『自然に学ぶ丹波山猿塾』に始まり『やったぜ！わが家を自力建築』『ゼロからの山里暮らし』と続き、本書『山猿流自給自足』は、まさにその集大成と呼ぶべき10冊の実地体験の記録である。

「山猿塾」は、夫婦二人の平穏な暮らしであるが、そこにはニワトリやウサギ、池のコイやアマゴ、それにシカやイノシシの大動物からムカデやヘビなど様々な生物が加わって、賑やかな交流がある。ある場合にはそれと敢然と敵対し、苦闘する姿もユーモアたっぷりに描かれている。

「創作住宅」と呼ぶ居住空間は隅々まで創意工夫が凝らされ、自然と共に生活しながら、なお快適さを失わない住宅のあり方を追求している。

著者は、巻末にこう書いている。

〈……残る半生は、自分が実地に理想をどこまで実現できるか試すことに賭けていた。自分が実物の見本を創り、その実地体験が本物の取材だと考えていた〉（傍点、筆者）

最終章に地元との交流を書いているが、降って湧いた暴力団がらみの「墓地事件」に、わが正義のジャーナリストがどう関わり、区民と共に裁判をどう勝利したか。本書を読んでのお楽しみに。

（池田）

■郷里について書かれた本

今尾恵介著
『「平成の大合併」で日本地図に大異変！生まれる地名、消える地名』
実業之日本社　発行

音楽雑誌編集者であった著者は、地名・地図・鉄道への思いが嵩じ、「地名の謎」等の名著を次々と出版したあげく日本国際地図学会評議員も務める地名専門家となった。延喜式にも登場する由緒ある地名を棄てた軽薄な「イメージ地名」、中心地に著名な地名があるのに対等合併を強調した合成地名、やわらかさを理由とする、ひらがな市町村名に異議を唱えてきた著者が、憂国の想いを込めて上梓したのが本書である。その筆捌きは、いつものとおり軽快だが、行間から憂国の念は伝わってくる。そして「こうすべきだ」と信念を持って記している。

昭和の合併で滅茶苦茶になった我が国の地名が、平成の大合併で先祖の文化遺産を破壊してしまったと説く著者は、最近の「トンデモナイ」地名を分類していく。先ず雨後のタケノコのように現われた、ひらがな地名（かすみがうら市、つくばみらい市等）が槍玉に挙げられる。続いて、古代からの歴史があるのに現われた方位つき地名（西東京市、四国中央市等）、憧れの名前を追って出現したブランド地名（伊豆市、南アルプス市、四万十市等）、もはや地名ではない平成創造地名（さくら市、あさぎり町、温泉＋二十世紀梨＋砂浜＝湯梨浜町等）が紹介される。

そして筆者が鉄槌を下すのが奥羽市、丹波市、瀬戸内市のような「旧国名から広域地名まで…大風呂敷地名」である。奥羽といえば陸奥の国、東北の太平洋岸地域全体の広域なのに何ごと。分国前の丹後国も含んでいた大国、丹波を、亀岡や綾部、福知山、篠山をさしおいて早い者勝ちで名乗るとは何ごと。古代以来の地名である氷上市が自然なのに、と忠告する。皆の瀬戸内海を独り占めする瀬戸内市もひどいが、すぐに撤回した太平洋市に比べるとマシかもしれないと記す。

著者は古代からの遺産、郡名維持を主張し、兵庫県各地が難読にこだわらず朝来市、養父市、多可町、宍粟市を誕生させたのに敬意を払う。そして宍粟市と宍禾（しさわ）市の決戦も現郡名と古代郡名の選択であり、他に例の無いアカデミックな決戦と賞賛する。

ところで、公募トップの氷上市を候補から除外したような事例は他にもあるのだろうか。南セントレア市も公募市名には無いのに合併協議会が候補として考案し採用したものだが猛反対となり、ついに合併そのものが破談となったという。（徳田）

■郷里について書かれた本――

皆川盤水監修
『新編　地名俳句歳時記』
東京新聞出版局　発行

俳句でお馴染みの「歳時記」は、四季別・季語別に記されているが、本書は俳句に詠まれた地名を北海道から沖縄まで並べ、その地で詠まれた俳句を選び出して風土・歴史・名所・その地にゆかりある人物を簡潔に解説したものである。中央公論社から『地名俳句歳時記』、角川書店から『ふるさと大歳時記』が先行出版されているが、何巻もある大作で持ち歩けない。こちらは旅にも携行できるB6判の本である。対象は正岡子規以降の現代俳人の代表作、話題作から選んだとある。

残念ながら東京新聞の編集だから東日本に偏倚するのは仕方が無い。正味三八七頁の俳句紹介の中で、関東・甲信・北陸・東海だけで一八五頁と半分弱を占める。広大な北海道や九州・沖縄が二〇頁及び二五頁なのに関東だけで七〇頁を占める。例句は個人句集や俳句雑誌から広く収集するよう努めたそうだが……。

だが、本誌の読者に「感激せなアカンで」と言いたいのは、兵庫だけで一〇頁の配当なのに、氷上・青垣町・丹波富士・高源寺・達身寺・神池寺という六項目に一〇句が紹介され、一頁弱を占めていることだ。隣の篠山などは二句だけで「忘年会隣は丹波篠山衆」という、明らかに他所で詠まれた句も選ばれている。残念ながら田捨女に熱を入れてきた柏原も登場しない。

地理的な考察は実に頼りない。丹波富士といえば多紀郡では高城山、氷上郡では春日町多利の丹波小富士であるが、ここでは「青垣町の大箕山。山名は大きな箕の形に見えることによる」と記されている。佐治出身の旧友に尋ねても「誰が富士と呼ぶかいな」と冷たいが、最近は、この大箕山や春日町の三尾山を「丹波富士」に仕立てているらしい。富士は美しい裾野を持つ独立峰であるべきだ。

青垣町という項目も、この町名を詠み込んだ名句があるからではなく、高座神社や細見綾子生家を詠んだ三句を集積するためのものだ。それなら高座神社か芦田の里がぴったりではないか。神池寺を「丹波市第一の名刹」と持ち上げてくれるが、振り仮名は「しんちじ」となっている。『日本名刹大辞典』を参考にしたそうだ。

とはいえ、同級生である山猿会員の句を発見して辛口の評者も大感激。旧知の俳人たちに本書を宣伝して一日を過ごした。

（高座神社）

蚕の宮紅葉は赤をきはめたり

中山純子

（徳田）

◆足立かをるさん

健やかに楽しく日々充実したこの頃です。

◆足立真一・松子さん

ふるさとトピックスに氷上郡内百歳以上の男性二人とありました。明治三十七年三月生まれの父は、ことしも山ざるを喜んで、すみからすみまで読ませていただきました。元気で野菜作りを楽しんでおります。

◆井本義一さん

毎回の編集ミスに苦言を呈します。前三十四号は校正原稿を提出しているのにミス。今三十五号は校正依頼はなかったが、パソコン入力原稿（コピー）を提出したのに、四十九ページ「健康相関図」の上から二段目右「パートの職務」が「パートの職種」に。四段目右から二つ目「ラジオ深夜便」が「ラジオ体操」になっていて、投稿者の意思が誤って意味不明に伝えられている。常識では考えられない。淋しい思いでなんともやりきれません。愛猫「ケイスケ」の写真をお返しください。

◆岩槻邦男さん

兵庫県立人と自然の博物館へも通っております。十一月二十日もそちらのほうで先約があり、出席できません。ご盛会を祈ります。

◆植田憲雄さん

ご存知のように、丹波市の発足に当たり、市長選挙のことで、忙しくしております。残念ながら欠席します。来年は新市長同伴で出席します。

◆上野重喜さん

丹波市発足の年。ご盛会を祈り申し上げます。台風・地震で日本列島大荒れ。「雨降ッテ地固マル」ようでありたいものです。

◆大江範子さん

父逝って二十年、母も三十年、青垣には年老いた叔母たちのみで、私の子供は少し、孫は全く（田舎のことを）知りませんので、郷友会も退会させていただこうと思うこの頃です。いろいろありがとうございました。

◆大木千里さん

おかげさまにてつつがなく暮らしております。先月も信州方面と若狭方面と二度の旅をしてまいりました。

◆大野　均さん

平成六年に脳卒中を患い、左半身不能で車椅子生活ですので外出は苦痛です。送迎つきで週二日区立のデイセンターに通所中です。

◆大和田智子さん

四歳、二歳、三ヵ月の三人の子育てに追われ、外出することもできません。

◆兼松幸夫さん

家庭の事情で奈良での生活が多いこの頃です。

◆小山とし子さん

古稀の同窓会で京都に行ってきました。ふるさとは遠きにありて思うものですね。健康で過ごすことが、最高の喜びで、日々感謝しています。

◆酒井重男さん

七月末には帰郷し、社団法人日本技術士会で理化学研究所の財団法人高輝度光科学研究センター（Ｓｐｒｉｎｇ８）を見学してきました。

◆坂上　豊さん

平成の大合併で氷上郡がなくなり、丹波市となることを知り、驚くと同時に大きな田舎が大きな街になることに期待がかけられます。

◆佐藤菊子さん

ふる里は遠きにありて……の詩のように、戦後のめまぐるしい社会の変化にふる里を離れ、ふる里の住所も幸世村から氷上町に、そして丹波市にと。これから住むところはまだ決めていません。（夫の引退で、いまは子供とともに住んでいます。）後ほど決まりましたらお知らせします。

◆篠原よね子さん

手首を折りまして一年半になりますが、まだよくなく体調をくずしております。

◆大録和代さん

最近は小五の息子の少年野球の観戦にはまっています。仕事もがんばっています。

◆竹内博子さん

今年は異常気象続きで、新潟中越災害で近くに親族も住んでいて心配しています。私も左手のしびれにため息の連続です。薬も効き目なく、団地内五十軒の人達と毎日顔を合わせて、一人暮らしも多忙です。

◆田中清昭さん

六十二歳。貿易関係の仕事を探していますが、見つからず苦労しています。

◆富田貞子さん

懐かしい丹波の便りをありがとうございます。年を経る毎に恋しい故郷ですが、なかなか帰丹の機会もありません。でも、この十一月二十日は還暦の同級会で帰ります！。

◆堀井隆川さん

六十歳の坂道を登り始めようとすると、やはり身体の一部もオーバーホールしなければならないようです。「一病息災」と心得、一日一日を丁寧に報恩と感謝の精神で生き抜くことが大切と考えるようになりました。

会・員・だ・よ・り

◆水谷正寛さん

私事で恐縮ですが、昭和二十年三月国民学校初等科卒業に際し、関西氷上郷友会から褒状をいただいたのを記憶しておりますが、社会に対して十分なお礼をしないうちに老体となりました。

◆水船隆昌さん

出席するつもりでしたが、当日私宅の建て増し地鎮祭を行いますので欠席させていただきます。よる年波で検査検査の日々を過ごしておりますが、本人は至って元気と思っています。思い違いでしょうか。

◆村田吉民さん

「山ざる」誌ご送付ありがとうございます。「ふるさとの会」当日は先約の「戦国城跡の構造」講演を聴講したく残念ながら欠席します。年二回のご案内をいただくたびに懐かしくなり、丹波の友人に電話をしてしまいます。

◆八木信行さん

お誘いありがとうございます。あいにく当日は職場の旅行会と重なっており出席できないのです。貴会のご盛会を祈念しています。

◆山岸幸子さん

「山ざる」誌をいつも楽しく懐かしく拝読しております。今回の「ふるさと随想」は感動するものばかりでした。新生「丹波市」の発展を祈っております。

◆山口和久さん

元気にやっておりますのでご安心ください。最近はホームページを立ち上げまして凝っております。http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi0330/興味のあるかたはのぞいてね。

◆若森敏郎さん

このところなにかと仕事が重なり、欠席勝ちでしたが、今度は出席可能とおもいますので、久しぶりに皆様にお目にかかれるのを楽しみにしております。小生今のところ元気で、二年後の傘寿を迎えられそうです。

◆訃報

平成十六年九月から十七年八月までに事務局に届いたものです。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

前田　誠殿　平成9年
近藤勇夫殿　平成15年12月5日
山田勝康殿　同年10月
小田知尊殿　平成17年3月30日

◉寄附者芳名

中居　篤子殿	一五、〇〇〇円
谷垣　尚殿	一〇、〇〇〇円
山内　喜夫殿	一〇、〇〇〇円
足立　吉雄殿	五、〇〇〇円
上野　重喜殿	五、〇〇〇円
荻野　武殿	五、〇〇〇円
木呂子恵美子殿	五、〇〇〇円
金出　一郎殿	五、〇〇〇円
近藤　勇殿	五、〇〇〇円
谷口　捷殿	五、〇〇〇円
谷口　浩章殿	五、〇〇〇円
堀井　隆川殿	五、〇〇〇円
生田　清弘殿	三、〇〇〇円
大野　義明殿	三、〇〇〇円
兼松　幸夫殿	三、〇〇〇円
桑谷　中洋殿	三、〇〇〇円
高見嘉都司殿	三、〇〇〇円
村上　久夫殿	三、〇〇〇円
山田　良一殿	三、〇〇〇円
渡辺　和代殿	三、〇〇〇円
渡辺　則幸殿	三、〇〇〇円
山口　泰男殿	二、〇〇〇円
足立　和孝殿	一、〇〇〇円
足立　徳子殿	一、〇〇〇円
植田　茂樹殿	一、〇〇〇円
梶原　康弘殿	一、〇〇〇円
坂上　勝朗殿	一、〇〇〇円
高畑　八郎殿	一、〇〇〇円
千種　倫幸殿	一、〇〇〇円
藤田　純殿	一、〇〇〇円
本城　英明殿	一、〇〇〇円
山口　和久殿	一、〇〇〇円
大石佐代子殿	五〇〇円
塩見みつゑ殿	五〇〇円
千葉　淳子殿	五〇〇円

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。

◉

テーマ：①ふるさと随想
②近況エッセイ
③会員だより（短信）
④催し（個展・同窓会など）
⑤丹波を撮る（写真）など

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは平成18年８月●日です。

原稿枚数：400字詰４～５枚程度

送付先：〒247-0005 横浜市栄区
桂町１－１－１－101
㈱ホンゴー出版内
『山ざる』編集部
TEL 045－895－2712
FAX 045－895－4338

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピイをお送りください。

展覧会

◉二玄社創立50周年記念「良寛墨宝展」

㈱二玄社（渡邊隆男社長）が創立50周年を迎えた記念企画「木村家伝来・良寛墨宝展」が、さる4月20日～26日まで東京・港区の東京美術倶楽部で開かれました。

世塵に染まらず飄々として生きた人柄を慕って今も人気が高い良寛ですが、今回の特別展では、良寛が晩年を過ごした新潟県の旧家・木村家に残された門外不出の遺墨が一堂に展示されるとあって、多くの参観者で賑わいました。

展示百余点の中で、ひときわ目を引いたのが「六曲屏風」の行草や絶筆となった長さ約11メートルの「和歌巻三巻」で、円熟した最晩年の境地を余すところなく表現したものでした。

「良寛の書は、最晩年になって線の細みと軽みを完成させ、小刻みに震える線に良寛の息遣いがそのまま表現された余韻縹渺（ひょうびょう）として摩訶不思議な書境に到達している」と新潟大名誉教授の加藤僖一氏は述べています（「出版ダイジェスト」3・10日付）。

この特別展に併せて、二玄社が長年取り組んできた書道美術複製の金字塔とも言うべき「中国書画名宝展」も同会場で開催され、台北・故宮博物院所蔵の中国美術史上の名筆・名画の数々に参観者は圧倒されていました。

なお、この特別展は5月2日～5日まで大阪展（大阪美術倶楽部）も開かれ、東京展と合わせ1万6千人の参観者を得て大好評を博しました。

◉荻野美穂子展

荻野美穂子展は、平成17年5月21日から27日までの7日間、東京銀座「アトリエTK」で開かれました。

公演

◉10回記念 西崎祥舞踊公演

西崎祥さんは、平成元年に故郷丹波に「舞踊研究所」を設立し、舞踊公演を行ってきましたが、今年で10回目に当たるのを記念した「西崎祥舞踊公演」を去る5月22日、丹波の森公苑ホールで開催しました。記念公演にふさわし

く、本格的な古典舞踊でプログラムを構成し、梅津流家元・梅津貴昶氏を特別ゲストに迎えての格調高い公演となりました。会場には早朝より大勢の観客が詰めかけ、補助席で間に合わず、立ち見がでるほどの人気を博しました。

公演は、まず会主・西﨑祥さんが清元「四季三葉草」で開幕を祝い、門下生がずらり舞台に並んでの口上のあと、大曲「男女道成寺」など10数番を熱演、新名取の披露、特別ゲストの「地唄舞」など古典舞踊に観客を魅了しました。

西﨑﨑さんは、「思っていたより多くの人に見ていただきうれしかった。お客様は、本格的な古典舞踊の良さに満足していただけたと思います。これを節目に初心に返り、みなさんに喜ばれる踊りを披露し、次の世代に向けて一人でも多くの人に〝日本のもの〟を伝えていきたい」と話していた。

なお、西﨑さんはこの4月に東京国立劇場に特別出演して清元「うかれ坊主」を踊ったほか、この秋には「神奈川伝統芸能の会」や舞踊協会の「邦舞祭」など地元でも活躍されています。

同窓会

◉平成17年度柏陵同窓会 東京支部総会開く

平成17年6月18日（土）例年どおり九段会館において開催されました。

懇親会の準備が例年に比べて遅れ気味であったことで少々気を揉みましたが、そこは丹波人気質、担当学年の11回生（昭和34年卒業）の皆様がしっかりと準備、運営をしてくださいました。

来賓として本部から植田憲雄会長、阪神支部から鈴木啓之氏、そして兵庫県東京事務所からもご参加いただきました。赤井紀男氏司会のもと恒例の柏陵セミナー、総会そして懇親会へと移りました。

セミナー講師は、永年ＪＩＣＡ（国際協力事業団）で活躍された前田武彦氏で「パラグァイの発見者」と題した南米パラグァイの風土・風俗やその歴史。人間よりも牛の数の方が多いというこの国、氏のエピソードを織り交ぜながらのお話は、たいへんおもしろく興味深い内容でした。

植田会長のスピーチで始まる懇親会も総勢80名を超える盛会のうちに、たいへん楽しい一日となりました。

また郷里の西山酒造（西山裕三代表）

から例年のように、全員分の清酒をご寄付頂きました。誠にありがとうございます。

来年の開催予定は平成18年6月25日（日）、九段会館となっております。担当学年の12回生の皆様どうかよろしくお願いいたします。（事務局・藤田）

◉丹波の旧友迎え「柏九会」

東京柏九会（柏高第9回生）は、旧友が上京する度に、その人にぜひ会いたいという者が赤坂迎賓館に程近い「われらの迎賓館」に集まってお迎えします。何を隠そう、その店は新宿から四谷3丁目へ移った「りんごの絆」。店主は柏原町出身の山本明男氏です。昨年10月末にも黒井で歯科医院を営む原周作君を囲んで地元民8名が集まりました。駆けつけたのは主として同じ3年4組ですが、さらに明徳中学出身、汽車通学仲間、クラスも村も違うが会いたい者とご縁は様々。永年の歯科校医として生徒の虫歯患者低減に尽くした功で科学教育相から表彰されたのが原君上京の理由ですが、そこで皆は想いだしたのです。我々の卒業式寸前、2月の全校朝礼で、保健委員として1年間よく尽くしたとして県知事もしくは柏原保健所長からの表彰状を校長から授けられたのが山本晃少年と原周作少年の二人だったことを。

芦田元総理が来校された秋の学園祭でも、文化部生徒に混じって保健委員会も人体模型を飾り予防医学啓蒙の展示を行なっていました。奇しくも二人とも明徳中学出身ですが、少年時代から今に至るまで体育教師および歯科医として保健に関連する仕事に携わっていたのを改めて認識しました。高校入学50周年を飾る素晴らしい祝賀会となりました。（徳田八郎衛・記）

同好会

◉氷上ゴルフ同好会 第100回大会開く

平成17年9月8日、台風一過の抜けるような青空のもと、千葉・成田ゴルフ倶楽部において第100回記念大会が催されました。

年に4回平日開催を旨とし、発足25年目を迎えたことになります。メモリアルということで、世話役の岡吉明さんの準備にも一段と力が入りました。

参加人数は過去最高の35名、その並み居る強豪のなかで見事優勝されたのは、郷友会の世話役でもあります坂上勝朗さんでした。ゴルフを始められてまだ日が浅いということですが、その上達振りに皆驚かされました。

この1年の成績は以下の通りです。

なお、郷里の丹波新聞社よりメモリアル賞として、「丹波こしひかり」30kgの寄贈を受けました。

○第97回（平成倶楽部）
1・岡　吉明（88）
2・金出　一郎（82）
3・上田　雄彦（94）
○第98回（泉C・C）
1・大野冨士夫（94）
2・岡林　逸男（90）
3・山田　良一（94）
○第99回（江戸崎C・C）
1・野村　修己（87）
2・大石佐代子（103）
3・畑　時美（83）
○第100回（成田G・C）
1・坂上　勝朗（110）
2・上田　雄彦（92）
3・山田　良一（93）

次回開催は平成17年12月8日、日本カントリー倶楽部の予定です。奮ってのご参加をお待ちしております。氷上ゴルフ同好会の過去の様子はホームページは http://www.pcc-taiyo.co.jp を覗いてみてください。

（藤田　徹・記）

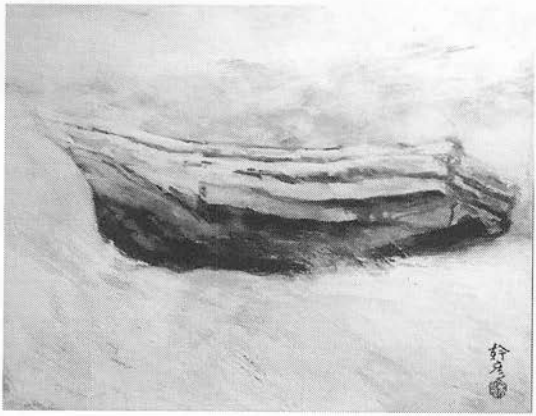
本誌発行にご協力有難うございました◆

玄'05 常岡幹彦 日本画展

会　期／2005年11月14日(月)～20日(日)

11:00AM～6:00PM（会期中無休・最終日5時閉場）

会　場／ギャルリー・ゴパンダール



北の浜10P

今回、小品個展としては初めて、"玄"のタイトルをつけました。
玄の世界を目指し、一つの穴を真剣に掘り下げようと思っています。ご感想をお聞かせいただきたく御案内申し上げます。

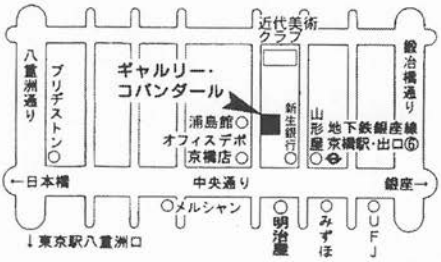
お花等のお気遣いなくお出かけ下さいますようお願い申し上げます。

ギャルリー・コパンダール

〒104-0031 東京都中央区京橋 2-7-5
京ニ小林ビル 1F
TEL 03-3538-1611
FAX 03-3538-1633
E-mail copaindart@m7.dion.ne.jp

交通のご案内

- 地下鉄銀座線
  京橋駅下車６番出口より徒歩2分
- 都営地下鉄浅草線
  宝町駅下車A6番出口より徒歩3分



予告

紺綬褒章受章記念

常岡文亀・幹彦親子展

会　期／2006年3月11日(土)～4月16日(日)
（月曜休館・月曜祝祭日の場合は翌日の火曜休館）

会　場／丹波市立植野記念美術館（企画）
〒669-3603　丹波市氷上町西中615-4
TEL.0795-82-5945

屏風などの大作中心の個展です。お序の折、ご覧いただければ幸いに存じます。

●石生、又は柏原駅下車後、神姫バスで「京橋」下車すぐ。

◆本誌発行にご協力有難うございました

猿友会

井田悦子
大石佐代子
小田明子
可部美智子
岸本昌子
喜田綾子
小糸イキ
笹倉郁子
篠原よね子
千葉淳子
長尾貴美代
安原三智子
塩見みつえ
渡邊貴美子

ビル・マンションの総合管理

株式会社 長友（ちょうゆう）

代表取締役 谷口浩章
（氷上町出身）

本　社　〒101-0041　東京都千代田区神田須田町２－６
TEL 03 (3257) 9611　FAX 03 (3257) 9619
E-mail h. taniguchi@mx4. ttcn. ne. jp

大阪支店　〒541-0048　大阪市中央区瓦町３－５－７
TEL 06 (6222) 5076　FAX 06 (6222) 5025

Takeland

エクステリア専門商社

株式会社 トコナメエプコス

会　長　松下文雄（柏原町）

代表取締役　広瀬寿和（山南町）

〒160-0003　東京都新宿区本塩町23 第２田中ビル
TEL 03－3354－0211　FAX 03－3354－7767

◆本誌発行にご協力有難うございました

調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木　村　つ　た　江

〒182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘2－39－5
電話 03－3300－6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状　第2-319号
技術士（電気部門）登録証　第15810号
エネルギー管理士（電気）免状　第2857号
エネルギー管理士（熱）　免状　第5191号

若森技術士事務所

所長　若森敏郎

〒302-0023　茨城県取手市白山5－4－13
TEL・FAX 0297－72－0907

関東とふるさとをつなぐ“グローカル”な紙面

創刊1924年

週2回(日・木)発行
1ヶ月 1,220円(郵送料200円)

丹波新聞

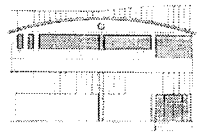
代表取締役社長 小田晋作

〒669-3309
兵庫県丹波市柏原町柏原201
tel 0795-72-0530
fax 0795-72-1956

丹波新聞社

http://tanba.jp

東・名・阪で事業展開中
大阪にＡＴＭテクニカルセンター
平成14年11月１日竣工落成



三協運輸株式会社

取締役社長 岸本 勲

(氷上町出身)

本社 〒121-0064 東京都足立区保木間１－１－３
TEL 03 (3860) 8112 FAX 03 (3860) 1631
大阪支店 〒578-0911 大阪府大東市新田中町３－３
TEL 072 (806) 6821 FAX 072 (806) 2831
名古屋事業所 〒457-0837 愛知県名古屋市南区加福町３－５
TEL 052 (691) 8574 FAX 052 (612) 2032
埼玉支店 〒363-0008 埼玉県桶川市大字加納字379－１
TEL 048 (728) 9380 FAX 048 (728) 9381
倉庫 東京・大阪・名古屋・埼玉・兵庫・北海道

◆本誌発行にご協力有難うございました

人と技術で社会に貢献する

株式会社 ユー・ティー・ケー

代表取締役
会　　長　水船　隆昌

本　　社：〒102-0083 東京都千代田区麹町５丁目３番地　麹町秋山ビル
Tel 03 (3556) 8484　Fax 03 (3556) 9577

東海営業所：〒319-1111 茨城県那珂郡東海村舟石川764-10　東成ビル3F
Tel 029 (283) 0460　Fax 029 (283) 0469

業務内容：・原子力関連事業　・人材派遣事業
・訪問及び居宅支援介護サービス事業（ハートステーション）
・節水工事業　・食品等の卸及び販売

コンピュータ・データ処理　－少量でもお任せください－

株式会社　**サイモン・デジタル・センター**

仕事内容：入力代行（名刺、ハガキ、アンケート、帳票　ほか）
出　　力（宛名ラベル、直接印字、帳票出力　ほか）
そ の 他　データ管理・メンテナンス・事務局代行

専務取締役　塚口　智（氷上町油利）

営業部長　藤田　徹（市島町今中）

〒103-0014　中央区日本橋蛎殻町１－14－10
アナリティカビル５F
TEL **03-5659-3081**

春日大路の山里
春花・夏花の香りいっぱい。
美味しい山里の花密が採れています。
蜂の蜜
御贈答に！産地直送!!

健康食品
プロポリス（丹波春日産）
樹木の若芽が出て蜜蜂が一生懸命働いてプロポリスを集めました。ストレス解消・健康管理に大好評！

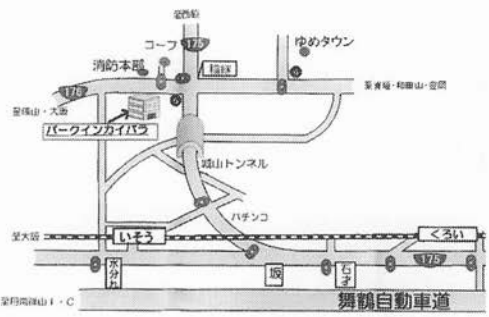
プロポリス

代表　山内秀樹（柏高 第11回生）

秀 やまひで猪肉店 養蜂部
丹波市春日町栢野1064　TEL.0795-75-1773　FAX.0795-75-0958

パークイン
Parkinn KAIBARA
(株)柏原ビジネスホテル
TEL. 0795-72-3525
FAX. 0795-72-3495
〒669-3311 兵庫県氷上郡柏原町母坪380

ご宴会・同窓会・ご商談・ご宿泊に



・会議室、宴会場完備
・駐車場（50台、大型バス駐車可）

ＪＲ福知山線柏原駅よりタクシー5分
近畿自動車舞鶴道春日インター7分

●お食事は
蔵出し料理 あじくら
TEL. 0795-72-3715

◆本誌発行にご協力有難うございました

あだち眼科院長／医学博士
順天堂大学眼科 非常勤講師
足立和孝
〒347－0015
加須市南大桑字下鳩山一六二〇－一
TEL ○四八○－六五－五九八八
FAX ○四八○－六五－六○九七
E-mail:kazu358@pastel.ocn.ne.jp

東京都渋谷区日中友好協会理事
日産労連・エルダークラブ幹事
広範な国民連合・東京世話人
EMネット埼京理事
足立和巳
〒183－0051
東京都府中市栄町一－一五－二七
TEL・FAX ○四二－三六四－七二二七

足立かをる

株式会社 トレンタ
足立真一
〒211－0005
川崎市中原区新丸子町七○一
電話 ○四四－七二二－六三七一
自宅電話 ○四四－八五四－六三四○

株式会社 ナレッジリンク
足立国際会計事務所
代表取締役
税理士・米国公認会計士（Certificate）
足立知佳子
〒152－0035
東京都目黒区自由が丘一－一三－一四 藤タワービル六○二
TEL ○三－三七一八－八○四七 FAX ○三－三七一八－八一四七
E-mail:cadachi@aia.gr.jp

足立静雄

本誌発行にご協力有難うございました◆

日本損害保険協会特級（一般）資格　第特一三五八六号
飯田保険事務所
飯田光雄
〒285－0045
千葉県佐倉市白銀四－十四－五
電話　〇四三－四八五－〇五〇三
ＦＡＸ　〇四三－四八五－〇二九一

明治四年創業・伝統銘茶
株式会社　明日香園
代表取締役　池畑廣士郎
本社　東京都豊島区南池袋二－二六－五
電話　〇三－三九八〇－三七四一

生田清弘
東京都世田谷区成城一－七－七
電話　〇三－三四一五－一八九三

井本義一

上野重喜
〒234－0054
横浜市港南区港南台三－一七－二二
TEL・FAX　〇四五－八三二－七三三一

有限会社　ＰＣＣ大洋
岡吉明
〒351－0014
朝霞市膝折町三－七－五
TEL　〇四八－四六〇－一六〇一
FAX　〇四八－四六〇－二三九七
http://www.pcc-taiyo.co.jp

◆本誌発行にご協力有難うございました

岡林逸男

〒177－0051 東京都練馬区関町北二－七－一七

荻野武

小田富士夫

梶原清

やす子

株式会社 アイ・ケイ・アイ

代表取締役 岸田勇

〒103－0013 東京都中央区日本橋人形町三－七－一〇

電話 〇三－三二四九－五二六一

木呂子 惠美子

本誌発行にご協力有難うございました◆

久保春雄

〒300－0031
土浦市東崎町十三－二－六〇四
電話 〇二九八－二二－二九七八

栗田功

坂上明

坂上勝朗

坂上豊

合唱指揮者

笹倉強

〒352－0014
新座市栄四－五－一一五
TEL・FAX 〇四八－四七七－五六四〇

◆本誌発行にご協力有難うございました

高見嘉都司

〒173－0025
東京都板橋区熊野町四〇番十一号
電話　〇三－三九五六－〇六〇〇

高見秀史

株式会社ディノス　顧問
自宅　E-mail:hidetakami@aol.com

株式会社　シードコーポレーション
代表取締役　千種倫幸

東京都中央区銀座一丁目二一－九
電話　〇三－三五六七－九七〇〇

㈱サイモン・デジタル・センター
専務取締役　塚口智

東京都江戸川区東葛西六－一－十七
電話　〇三－五六五九－三〇八一

鶴田宏

日本舞踊　西崎祥
端唄　根岸妙

〒224－0027
横浜市都筑区大棚町五〇〇－八
電話　〇四五－五九一－六六五五

本誌発行にご協力有難うございました◆

青葉山
八王子
真照寺
青葉霊苑（都営八王子霊園隣り
第二期墓地分譲案内中）
住職
堀井隆川
〒193－0826
東京都八王子市元八王子町三－二三九七
電話 〇四二六－六三－八四〇三

村上末吉

村上久夫
〒168－0072
東京都杉並区高井戸東三－四－十二
電話 〇三－三三三二－七一三四

山口和久
恵理子・藤吉郎秀吉
賢一・寧々・愛々・茶々
〒196－0031
東京都昭島市福島町二－一〇－二七
電話 〇四二－五四四－八八六一
http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi 0330/

PHP文化フォーラム 埴生の宿
代表
吉住自由造
〒216－0033
川崎市宮前区宮崎五－五－三五
電話 〇四四－八六六－三六二一

渡邊隆男

◆本誌発行にご協力有難うございました

さすが&されど

60歳からの知恵と体験交流誌

隔月刊誌［さすが＆されど］好評発売中

本誌は読者投稿を主体に編集するユニークな雑誌です／日々の暮らしから世直しまで知恵と体験を交流し合います／年間購読料 3,500円（税・送料込み）下記へ。

時代と共にあなたの歴史

自分史年表

一家に一冊／書く・読む・調べる記入式歴史年表／定価1,800円（税・送込み）

これから書きつぐ生活ノート

メモリー50

1年2ページ、50年間書ける気軽なメモ帳／定価1,800円（税・送込み）

記念の年に贈る同時代シリーズ▶［昭和10年生まれ］（昭和8・16年生れは売切れました。）

既刊▶［昭和4・5・6・7・9年／昭和13・14・15・17年］■各巻3500円

株式会社 ホンゴー出版

代表取締役 池田 忍

〒247-0005 横浜市栄区桂町 1-1-1

☎045 (895) 2712／FAX 045 (895) 4338

Eメール：hongo@mocha.ocn.ne.jp

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますよう願い上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、〝丹波のきずな〟の強さを思います。

（山ざる編集部）

編集後記

★丹波で二十八年間、独り暮らしを続けていた母が今年五月に七十九歳で亡くなりました。私にとっては、丹波は母イコール故郷でしたが、今後は、丹波がどのような存在となっていくだろうか?と想いを巡らせています。（本城）

★市制に移行してから小学校校区、すなわち旧大路村、遠坂村といった地区が見直されてきました。補助金に頼らず自力で花火大会も開催しています。いいことだと思います。歴史的な郷名も残るし…だが旧氷上町地域の方角地名は何とかならないでしょうか。（徳田）

★会社勤めから開放されて一年四ヶ月、その間、私にとって「会社」というところは、なんと住み心地よく便利なところだったかと痛切に感じさせられました。本会の事務局業務にしましても、会宛に来る郵便物の整理、切手や事務用品の手配・購入、郵便物の差出などなど、もう手伝ってくれる人がいないのです。身辺雑用も、何からなにまで自前以外ではことが運びません。自分では「自立」しているつもりが、とんだ「心算」違いでした。こういう戸惑いとの葛藤を繰り返しながら、全く違った暮らしに煩わせられつつ歳を重ねて行くわけです。会員の皆様には何かとご不便ご迷惑をおかけしておりますが、ご容赦ください。（坂上）

★この6月に帰郷した折、福知山線谷川駅の売店で昔懐かしい「丹波漬」をみやげに買って帰りました。早速、夕食に食し、丹波味噌に山野菜を漬け込んだ独特の風味に満足していたのですが、容器の包みに印刷された原産地表示を見て、娘が「なにこれっ、実山椒は韓国産!」と言うのです。まさか!としばし絶句、丹波は山椒どころと吹聴していた手前、その名産が韓国産だったとは。よく見るとキュウリも中国産とあり、まさに面目丸つぶれで、そんな表示を見つけた娘に腹立たしさを感じました。早速、製造元に感想を寄せたらしく返信がありましたが、驚いたことに、その件に対する回答ではなく、会社の商品カタログと共に、韓国産表示の実山椒の試食品（10g）が同封されており、その無神経ぶりに驚きました。諸事情あってのことと経営者に同情はしますが、顧客対応の幼稚さと共に、地元の加工業者が地域農産物の育成発展に取り組む姿勢が窺われないことに一抹の寂しさを感じた次第です。（池田）

山ざる　第36号

平成十七年十一月一日発行

〈編集委員〉
足立静雄　池田　忍　木呂子恵美子
足立和巳　小田富士夫　片岡クミ子
坂上勝朗　常岡幹彦　鶴田ゆき子
徳田八郎衛　本城英明　渡邊隆男

発行者　関東氷上郷友会会長　渡邊　隆男
〒174-0064　東京都板橋区中台3－27－I－401
坂上勝朗方・関東氷上郷友会事務局
☎〇三（三九三六）二四〇一
振替〇〇一一〇－三一一二三一三〇
製　作　株式会社二玄社
編集協力　株式会社ホンゴー出版

たいせつにします プライバシー
A860001(03)

Communication Creator
コミュニケーション・クリエイター

ハートへ、ダイレクト。

企業のメッセージを、お客様一人ひとりに向けて直接的に結びつけること。そしてお客様に心からご満足いただける商品やサービス、情報を提供し続け、企業との間に揺るぎない信頼関係を築くこと。これが、DMSの提唱してきた『ダイレクト・コミュニケーション』です。業界のリーディング・カンパニーとして長年培ってきたノウハウはデータベース活用やデジタル・テクノロジー、ロジスティクスと多岐にわたり、多くの企業からご評価いただいています。また、大切なお客様のプロフィールを扱う立場から個人情報保護にも積極的に取り組み、公的な認証である「プライバシーマーク」を取得しました。これからも、「コミュニケーション・クリエイター」として、企業戦略と生活者のプライバシーを尊重した、お客様の心をつかむプロモーションをご提案してまいります。

DMS
株式会社 ディーエムエス
本社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1-11 DMSビル ／ 大阪支社 〒535-0031 大阪市旭区高殿7-15-8
DMS第二ビル ／ 板橋業務センター ／ 江東業務センター ／ 朝霞業務センター ／ DMSロジスティクスセンター
■お問い合わせ：営業本部 営業推進部 TEL.03-3293-2970 FAX.03-3293-8497
■インターネットホームページ http://www.dmsjp.co.jp

加盟団体▶(社)日本ダイレクト・メール協会／(社)日本テレマーケティング協会／(社)日本通信販売協会／(社)日本広告審査機構

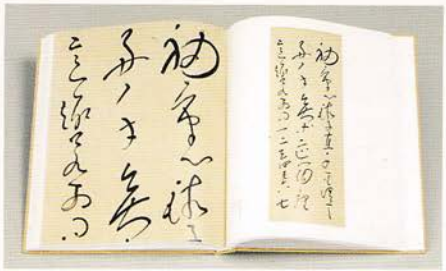
当社はメーリングサービス業界において最初にPマークを取得しました。また、日本工業規格「個人情報保護に関するコンプライアンス・プログラムの要求事項JIS Q 15001」にも適合していることが承認されています。

二玄社創立50周年記念出版

木村家伝来 良寛墨宝

良寛維宝堂 編

木村家の良寛を見ずして
良寛を語るなかれ
終焉の地にのみ伝わる
名品を集大成



◆木村家に伝来する良寛和尚の書跡 100 余点及び関連資料を、初めてカラー図版で一般に公開する。
◆「六曲屏風一双」と「貼り交ぜ屏風」に繰り出しを採用。左右1m近い観音開きのカラー図版は迫力満点。
◆資料として父以南、弟由之などの書跡35点も収録。
◆解説は加藤僖一氏及び名児耶明氏の両専家が執筆。

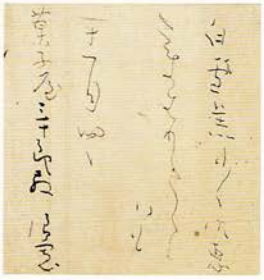
B4 判変型・上製函入・総カラー・244 頁

● 23,100 円 (税込)

＊詳細カラーカタログ送呈

木村家秘蔵 複製 良寛の書

良寛最晩年の庇護者であり、終焉の地ともなった木村家に伝わる秘蔵の墨蹟を精緻な複製によってご紹介します。良寛和尚の墨蹟を、お手元で楽しんでいただければ幸いです。



書状「白雪羔」

価格表

商品番号	商品名	頒価	発売記念特価
KR1	和歌巻〈全三巻〉(巻子)	126,000 円	限定品のため特価の設定はありません
KR2	五言詩「城中乞食了」(軸装)	63,000 円	**54,600 円**
KR3	「敬上憐下」(軸装)	53,550 円	**46,200 円**
KR3-A	「敬上憐下」(額装)	38,850 円	**33,600 円**
KR4	書状「白雪羔」(軸装)	51,450 円	**44,100 円**
KR4-A	書状「白雪羔」(額装)	34,650 円	**29,400 円**

※発売記念特価の期限は平成17年12月末日まで

＊詳細カラーカタログ送呈

二玄社 社長 渡邊隆男
東京都文京区本駒込 6-2-1 ／〒 113-0021 Tel.03-5395-0511 Fax.03-5395-0515 http://nigensha.co.jp